肩越しの青空

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
肩越しの青空

【Ｎコード】
Ｎ４９２５Ｕ

【作者名】
蒲公英

【あらすじ】
ことの発端は「結婚しない？」だ。つきあってもいない男に、そんなこと言われてごらん。冗談なんだか、バカにされてるんだか。熊みたいに大きい男は、もっさりした外見にもかかわらず、意外に食えない。「馬には乗ってみよってとこで、ひとつ」・・・身長差３６センチ、体重は倍近く。
あたしの明日は、どっちだ。

その1

「結婚しない？」
スポーツクラブのロビーで、半ジャージのあたしに声をかけた熊みたいな男は、とても機嫌の良い顔だった。
「はい？誰と？」
「俺と、君」
「なんで？」
意味わかんない、このバカ。
「絶対気が合うだろうし、楽しいと思うよ」

大学を卒業して地元に帰って、地元の中堅会社に就職してから、４年経った。
遊ぶのに不自由するほど田舎じゃないし、親元にいれば贅沢な生活はできる。
まわりの友達はそろそろ結婚しはじめ、次に男とつきあったら、それを視野に入れるのかなーなんて思っていたところだ。

あたしの前に立つ熊みたいな男は、高校の先輩で、別に連絡を取り合っていたわけじゃない。
スポーツクラブで前年の「入会費半額キャンペーン」で再会しただけだ。
「あれ？篠田？地元にいたのか」
「うわ、お久しぶりです。原口先輩も地元にいたんですね」
東京まで一時間もかからない場所なんだから、残っている人は多いけど。
弱小のバスケットボール部は、男女とも部としての許可はギリギリで、よく合同練習をした。
身長１５０センチ台にギリギリ引っかかっているようなあたしが、

試合に出たような部だ。

で、そいつが何故いきなり「結婚」なのか。
こいつと寝たことなんてない。
それどころか、一緒に出掛けたこともサシで飲んだこともない。
大体、結婚とか言われてすぐに喜ぶほど、困ってない。
あたしはそこそこ美人だと自負してるし、仕事もあるし、親との折り合いも悪くないのだ。

もっさりした体格と大きな厚い掌は、高校生の頃とあまり変わっていない。
2年先輩なので、部活動で一緒だったのは、3ヶ月程度だ。
「原口先輩がどこに住んでるのかも、知らないんですけど」
「そりゃ、結婚相手のことは知りたいよね」
「誰が相手だって言った？頭、大丈夫？」
「至って正常。とりあえず、意識をすり合わせなくちゃね、静音ちゃん」
脳味噌が煮えくり返りそうな脈絡のなさに、あたしは頭を抱えた。

その2

「送ろうか？」
「あたし、車なんだけど」
「俺、歩き」
どういう手段で送ろうとしたやら、判断に迷うところだ。
30センチ上から降ってくる声は、やたらめったら暢気で、世間話の続きみたいに聞こえる。
ロビーから出て駐車場を突っ切るとこ、あたしの斜め後ろを歩く嵩高い奴は、車までのこのことついて来るらしい。
「何？送らないわよ」
「発車するまで、お見送り」
開錠してシートベルトをつけると、原口先輩はにっこりと手を振った。
笑うと眼の縁に皺がたくさんできる、人の良さそうな顔。

「電話するから、待っててね」
「知らないくせに」
「高校の時の名簿、捨ててないもん。実家にいるんでしょ？」
ああ、今ほど個人情報云々がうるさくなかった時代、部員名簿には住所と電話番号がしっかり記載されていた。
何を考えているやら、深く考えようとすると頭がガンガンしてくる気がして、あたしはサイドブレーキを外した。
いいや、明日にしとこ。

家に帰って、とって置いたかどうか謎の、高校時代の名簿を見つけた。
原口昭文、3年3組。あれ、副部長だっけ？
家は・・・あれ？市内じゃないや。歩きって言ってたけど、駅まで

なのかな、それとも一人で住んでるとか。
高校時代に同じ部活だった美月に、とりあえずメール。
＞久しぶり。ねえ、いきなりだけど原口先輩って覚えてる？
間髪置かずに戻ってくるところが、暇な証拠だな。
＞おっきい人だよね。あんまり覚えてない。
そこからメールがいくつか続いて、日曜にでも会おうかって話になる。
地元の友達って、これができるから楽。

電話するって言ったくせに、原口先輩と次に会ったのは、ジムでマシントレーニングしてる時だった。
チェストプレスしてる時に声を掛けられても、困るんですけど。
しかも、あたしは話なんてないんですけど。
「サーキット終わったら、ラウンジでお茶しよう。待ってるから」
「あたし、お風呂も入るんだけど」
「じゃ、その後でいいや。ロビーにいるから」
無視して帰ってやろうかと思ったけど、ロビーを通らないとフロントにロッカーの鍵が返せない。

その3

眉だけ描いたすっぴんのあたしがロビーに降りた時、原口先輩は待ち合わせ用のソファで眠っていた。
待ってるとか言って寝るか、バカ。
そのまま帰ってもあたし的には問題ナイ。
でも灯りが消えるまで、ここで熊が寝ていたら、スタッフさんは困るんじゃないかしらん。
「・・・先輩、寝るんなら、お家に帰ってからの方が良いですよ」
ぼんやりと目を開けた先輩は、しばらく合わない焦点を無理にあたしの顔に合わせようとしてた。
「あれ？篠田？」
「あれ、じゃありません。寝ちゃうんなら、待ってるなんて言わないでください」
「ああ、ごめんごめん。恋人を迎える態度じゃなかったな」
「だから、誰が！」
やっぱり、放って帰れば良かった。

態勢を立て直すべく、ラウンジできっぱり否定することに決め，向かい合わせに座る。
「俺、バナナジュース。篠田は？」
「アイスティー。ドリンク代、持ってくれるんでしょうね」
「今に同じ財布になるんだから、どっちが払っても」
思わず、テーブルの下で足を蹴る。
平然とニヤニヤしてるのが、悔しい。
「幼稚園児に蹴られたって、大して痛くないだろうよ」
「失礼な。幼稚園児ってあたし？」
「体格差、それくらいあるんじゃない？体重、俺の半分くらいだろ」

トレーニングウエアの下の盛り上がった筋肉は、目の前に座るとすごい威圧感なのに、人の良さそうな表情と飄々とした喋り方が、それを帳消しにしてる。
「この際、きっぱり言いますけど」
「おっと。まさか条件を知る前にお断り、じゃないよね」
原口先輩はニヤニヤしたまま、テーブルの上で両手を開いてみせた。
「口を利くのも嫌な相手と、一緒にテーブルについたりしないよね。とりあえずお互いを知りましょ」
先に「結婚」を持ち出しといて、お互いを知りましょなんて、ふざけた話だ。
バカにされてんのか、こいつが真性のバカなのか。
「ってワケで、日曜日に出掛けよう。映画なら、アニメと実写どっち？」
「誰が行くって？」
「あれ、都合悪い？じゃ、土曜日の夕方からで」
・・・頭、痛。

「まさか、あたしに彼氏がいないとでも」
「いるの？」
いや、いないけどさ。いてもおかしくないでしょ、外見も、年齢も。
「言葉に詰まったところみると、やっぱりいないんじゃない。問題ナッシング」
「いないからって何も」
「ま、馬には乗ってみよってとこで、ひとつ」
この熊、意外に口が減らない。

その1

なんだかんだ言って、一緒に映画見に行った日曜日。
原口先輩は、頭が天井につきそうな小さな車であたしを拾って、シネコンでポップコーンとコーラを買った。
「アニメなんか見るの、久しぶり」
「世界に誇る日本の文化だぞ」
体は子供頭脳は大人！がキャッチフレーズのその映画は、確かに子供騙しじゃなく面白かったんだけど、いささかデート仕様じゃない。
隣の席は身じろぎもせず、ど真剣に画面を見ている。
館内が明るくなり、立ち上がったときに腰がよろけてしまい、あっと思ったら大きい手があたしの肩を支えてた。

なんか、すごい安定感。
この人、あたしが全力でぶつかっても、多分びくともしない。
あたしの家族って全員小柄で、一番大きい父ですら、男の平均身長よりも１０センチは低い。
だから実は、体格の良い人には、基本的に弱いのだ。
だけどねえ・・・ちょいと唐突すぎやしませんでしたか。
「踊り子が、バランス崩しちゃいかんでしょ」
「何？」
「笑夢（えむ）の美少女姉妹って、篠田だったろ？」
何年も前の新聞の地方記事が、いきなり蘇ってきた。

高知県発祥の「よさこい鳴子踊り」は全国中に飛び火して、あたしの住む市でも盛んだ。
あたしの住む町内会でもチームができて、あたしと弟も何年か踊った。
ある年、ツートップで踊るあたしたちの写真が、新聞の地方版に載

った。
美少女「姉妹」として。
弟は、その翌年から頑として踊らなくなった。
大学に入って地元を離れたので、あたしも踊らなくなり、実家に帰った後も誘われたけれどチームには戻らなかった。
「ずいぶん古いネタね」
「俺、あの年、見てたんだ。休憩所まで行って、声かけようと思ったんだけど」
あ、なんかいやな予感。

「一緒に踊ってた・・・妹さん？に蹴り入れてた。進むの早えーんだよっ！後ろに小学生がついてんだっ！って」
妹じゃないです。いくらなんでも、女の子を蹴りません。
「部活引退したばっかりだったしさ、篠田って小さいだけで印象薄かったから、ちょっと衝撃的だった」
高校の1年生と3年生って、なんて言うか、心情的には結構差があるから、原口先輩はあたしの猫の皮しか見てなかった筈。
「覚えてなくていい・・・っていうか、積極的に忘れて」
「忘れてた、去年まで」

その2

原口先輩がスポーツクラブに入会しようと施設を見学していた時、あたしはボクササイズの体験レッスンに励んでいたらしい。
だから彼が「あれ？篠田？」なんて声をかけた時、彼はすでにあたしがいることを知っていたのだ。
「イキのいい女だなーって。俺、つつくと壊れそうな女ってダメなんだよね」
あたし、見かけは他人より、ずいぶん華奢だと思うんだけど。
「俺は打たれ強いし、少々手荒にされても壊れない。いい組み合わせだと思うんだけど」
「あたしの好みは？」
「多少の不備には目を瞑っていただく、と」
身長差は正確には３６センチ、体重はあたしの倍。
外からどう見えるんだか、あんまり想像したくない気分。

別に恋人云々じゃなく、話し相手としてなら原口先輩は結構快適な相手だ。
話題は薄くないし、何かに偏っているわけでもない。
あたしも暇だし、映画や居酒屋につきあうのは、やぶさかでないかも知れない。
「原口先輩って、お仕事何してるんですか？」
「公務員」
「職種は？土木課とか？」
「篠田の携帯の番号とメールアドレス教えてくれれば、言う」
家が割れちゃってるのに、隠しても仕方ない。
笑うなよと念を押されたにも拘わらず、聞いた途端に堪えきれずに笑ってしまった。

「いや、良い職業だよね。最近は男の人も多いし」
「男は力技が使えるから、重宝されるんだ」
１９０センチ近い大男の保育士なんて、想像もできない。
「やっぱりピンクのエプロンしてるわけ？」
「既成品であると思う？縫ったよ、自分で」
「自分でえ？」
ますます笑いが止まらなくなり、息が苦しい。

「お買い得でしょ。身体も頑健、性格温厚、縫い物までできる」
確かにお買い得かも知れないけど、それが真実だとは限らないでしょ、自己申告のみで。
「疑り深い顔、してんなあ」
大体、彼が見た「あたしの顔」だって、あたしの中の一部でしかない。
あれがあたしの全てだと思われたら、超迷惑。
「いいよ、納得するまで観察してくれて」
上手く持って行かれたのだと気がついたのは、翌週の約束をした後だった。

その3

5月の終わりという時期が、幸いだったのかどうか、よくわからない。
先輩は実家を離れ、市内で暮らしているらしい。
「なんで？通えるんでしょう？」
「自分で稼げるようになったんだから、自分で生きろって追い出された」
そう言えば我が家の親も、あたしには帰って来いと言ったのに、弟には言わなかったな。

川越の街をぶらぶらと歩きながら、自分が一緒に歩いている人は誰だろうと考えていたりする。
話すときにいちいち上を向くと、首が疲れる。
歩幅はまるっきり違うのに、歩くペースが同じことに気がついて、彼があたしに合わせて歩いていることを知る。
途中でお弁当を買って、お寺で広げた時のことだ。
「あ、ペットボトルとお弁当箱、同じ袋に入れて捨てちゃダメ。あとで分別する人が大変」
何気なく言った言葉で、先輩はくしゃっと笑った。
「ふうん？エコ云々じゃなくて、分別する人の手間を考えるわけだ」

実は、エコ云々っていうのは自分の目にうつりにくいから、あんまり自覚はないのだ。
だけど、ゴミを広げて分別する人の大変さは、一度見ればわかる。
あたしもお祭りの後始末を何度か手伝ったけれど、日常的にその作業をする人のために、少し気を使ってもいいと思う。
「篠田って、俺が思ってた通りの考え方する」
満足げに頷く先輩は、あたしをどんな女だと想像しているんだろう。

「なんで、あたしに声かけたの？」
「隣のマシンにいた人が拭き取らないで立ち上がった時、普通の顔して隣の消毒してたから」
「はあ？」
「なんでもない顔して隣拭いた後にさ、スタッフじゃなくて、その人に直接文句言ったの」
あ、それは覚えてる。
隣の人が立った後に、汚れたままだと次に使う人は気持ち悪いだろうなあって汗を拭きとって、アルコール消毒までしてやって、それから腹が立った。
だって、使う人間の常識じゃない。
いくらお金を払ったジムだって、自分が使ったものの後始末くらい、自分でしようよ、大人なんだから。

――あの、すみません。マシン使い終わったら、汗を拭き取るようにと注意事項があるんですが。
――え？汗なんか、乾いちゃうから関係ないだろ？
あたしより何歳か上の男の人。
――直後に使いたい人は、困ると思います。
――いいじゃないか、そのためにスタッフがいるんだから。
男の人はあたしの顔をバカにしたように見下ろして、（あたしが小さいからだ）後ろを向いて去って行った。
スタッフさんが気が付いて、あたしに謝りに来たけど、謝られる筋合いはない。
あたしが彼に注意したくて、注意したんだから。

「スタッフに言いつけるとか、他人の不道徳を軽蔑しつつ黙ってるって選択肢は、ないんだ？」
実は、それで何度も痛い目は見ているのに、あたしは懲りてない。

「性分なんだもん」
「あの日に、篠田と結婚することにした」
することにした、とか言われても、困るんですけど！

その4

「猫だ。鮭の皮、食べるかなあ」
植え込みの隙間から顔を出した猫を見て、慌てて話題を変えた。
口を結んだビニール袋を開けて、中から食べ残した鮭の皮を出す。
「ノラ子に餌やるのはいいけどさ、触るなよ。引掻かれたりすると、感染症もらうから」
「え？」
思わず手を引く。
「ま、飼い猫でも持ってるけどね。日和見感染っぽいから、健康体ならそうでもない。ただ、子供だと発症・・・」
「あたしが子供だって言うの！」

思わず立ち上がって、ベンチを見下ろす。そんなに大層な差がないのが、悔しい。
ニヤニヤするな、余計悔しいから！
「子供と結婚しようとは思ってない。ロリコンでもない。でも、身体のサイズはそうでしょ？」
「無駄に大きいより、絶対マシ！」
「別に悪いとか言ってない。少なくとも俺にはマイナス点じゃない」
そう言ってから何を思ったか、先輩は私の腰をひょいっと掬って立ち上がった。

うわ、視界が変わる・・・ってか、何この体勢。
腕の輪っかの上に座る、いわゆる「子供抱っこ」の形。
「何すんの、下ろしてっ！」
じたばたして落っこちるのが怖くて、肩にしがみついた形で抗議する。
「俺の高さで周り見てみ？俺は腰を屈めれば篠田の高さになれるけ

ど、篠田が俺の高さに合わせられたりしないだろ」
周りにいる人の視線が気になって、それどころじゃない。
でも、そうか。３６センチって、こんなに視界が違うのか。
見える木の枝が違う。建物の高さが違う。

すとんと下ろされて、笑われてやしないかと他人の視線を窺ってしまった。
そして、ひとつ気がついたことがある。
「先輩、もしかしたら、歩いてる時ってあたしの頭の天辺しか見えないんじゃ」
「うん。気にしてないと踏み潰しそうになるけど、そんなのは園児達で慣れてるから」
「園児ほど小さくないっ！」
この熊っ！

その5

「原口先生？知ってる知ってる。うめ組さんで、折り紙が上手なの」
会社のパートさんから、そんな話を聞いた。
お子さんの保育園の名前が出た時に、原口先輩の勤め先だと気がついたのだ。
「背中とか腕とかに、常に子供がぶら下がってる感じ」
あの分厚い手で折り紙を折るんだと思ったら、笑いが止まらなくなった。

―折り紙が上手な先生、今日は来てなかったね。
―待ってた？悪かったなあ。
―待ってませんから、ご心配なく。
変なメール出しちゃったなあ。
実は、ボクササイズのクラスの男の子と、ラウンジでお茶を飲んできたのだ。
何度も顔を合わせている相手だし、ヒマだったし、ちょっと可愛かったし。
年下の男の子って、精神的にこっちが優位だから、すごく喋りやすい。

「彼氏、いるんですか？」
「そんなこと聞いて、どうするの」
そう突っ込んだだけで話を打ち切るのは、あわよくばって考えが丸見えでちょっと興醒めるけど、よくある会話だ。
言っちゃ何だけど、見かけで寄ってくる男は少なくない。
華奢で小さくて色が白くて、細い褐色の髪と大きい瞳。
おとなしそうなイメージが先行しちゃって、「喋ると台無し」なんて失礼なことを言われることも多い。

ごめんね、ストレートな性格で。
でもあの熊は、そこが気に入ったと言う。

実際のところ、原口先輩のことは何も知らない。
身体頑健は見ればわかるし、職業の裏づけも取れた。
映画の趣味はやや子供で、歩く時に歩幅を合わせる程度には、あたしに気を使ってくれてる。
そして、突然突拍子もないことをする。
悪い人ではないんだよね。
だから一緒に出掛けるのも喋るのも、苦痛じゃない。
それが「結婚」には、結びつかないけど。
そして、お茶を飲んでいる時にやけにキョロキョロしちゃったのは、超機密事項。

その6

※予備知識：よさこい鳴子踊り／高知県発祥で、鳴子と言われる打楽器（元々は鳥追いの道具）を両手に持ち、よさこい節をアレンジした曲に合わせて、前に進みながら踊る。アレンジは自由で、サンバ・ヒップホップ・ジャズ他何でもアリ。衣装も踊りも各チーム趣向を凝らし、ヘソ出しから振袖まで、やはり何でもアリ。チームごとのカラーはあるが、毎年衣装も曲も、当然振り付けも変化する。

「あのさ、正調よさこいって踊れる？」
スポーツクラブのラウンジで、原口先輩の言葉に首を傾げる。
まさか、よさこいの話をこんなところでされるとは。
「基本だから、忘れてなければ。なんで？」
「保育園で、チーム作るんだけどさ」
鳴子両手に踊る熊。
「後ろ向いて笑うな、正面切って笑え。何人か踊れるお母さんに頼んでるんだけどさ、俺も覚えないとならなくて」
「いや、そんなに難しくないでしょ、男踊りも女踊りも」
「そりゃ、踊れる人の意見だ。園児は踊りになんないから、大人くらいはちゃんと動かないと」
原口先輩は分厚い掌を合わせて、あたしに頭を下げた。
「篠田先生っ！俺に教えてくださいっ！」

家に帰って、ｙｏｕｔｕｂｅで確認した。
振って振って開いて進んで・・・かつて踊った記憶が蘇って、やけに夢中になって踊ってしまった。
これを、原口先輩に教えればいいわけね。

まだ6月になるところだし、お祭りは8月末だし、何回かで未経験者も覚えられる筈。
ん？教えるってことは、少なくとも覚えるまでは待ち合わせ続けるってことか？
また、上手く持って行かれた気もする。

練習場所が夜の公園ってのも、なんだかなあ。
こんな大男と二人っきりで夜の公園にいるっていうのは、近所の人たちに見られたくない。
自分の車で待ち合わせ場所まで行くと、駐車場にぼーっと大きな人影。
途端に、人気のない場所で男と待ち合わせて、しかも力では絶対に敵わない相手だと思い出す。
なんか、迂闊に隙だらけな約束をしたんじゃないだろうか。
人の良さそうな目尻の皺を見て、気を取り直して車から降りた。

まず鳴子の持ち方ね、なんて教え始めて、あっと言う間に1時間。
「ひえー・・・つっかれたー・・・」
石畳にべたっと座る原口先輩を見下ろす。
「急に冷たい所に座ると、痔になるよ」
「女のセリフだとは思えん」
あ、女の兄弟がいない人のセリフだ。
うちの弟、これくらいじゃ動じないもん。
「先輩、お姉さんも妹もいないでしょ」
「うん、弟がひとり。篠田は、妹だけ？」
訂正したほうが、良いのかしらん。
「あれね、龍太郎って名前なんだけど」

衝撃を受けた顔をした先輩は、しばらく黙った後にゆっくり口を開いた。

「美少女姉妹なんて記事にした新聞社に、抗議した？」
「え？そんなことで？だって、間違われることなんて年がら年中」
「プライド、傷ついただろうなあ。あの時、中学生くらいだろ？友達にからかわれたりして、ショックだっただろうな」
生真面目な顔に、こっちがびっくりしてしまった。
間違われちゃったのは仕方ないと思い、翌年踊らないと言い張った弟は、ずいぶんと根に持つタイプだと、あたしはこっそり呆れていたのだ。
原口先輩はもしかしたら、とても優しいのかも知れない。

その7

マシントレーニングもできない時間になっちゃったけど、とりあえずお風呂だけ入ろうと、スポーツクラブに顔を出すと、原口先輩がフロントに鍵を返すところだった。
「あれ？篠田は、今時間からトレーニング？」
「ううん。残業だったから、お風呂だけ入ろうと思って」
「メシは？」
「同僚と食べて来た」
「疲れてる時に、熱いサウナに入ったりするなよ。長風呂もダメ」
お母さんか、あんたは。

帰ってしまったと思っていた先輩がロビーに座っていたので、ちょっと驚いた。
「もしかして、待ってた？」
「もしかしなくても、待ってた」
当然のように頷く熊は、一体あたしの何だっていうんだろう。
「何か、用事だった？踊りなら約束だから教えるけど、今日は無理」
「つれないね、静音サンは」
「あたしに用事はないもん。疲れてるのに、お喋りでもないし」
言った後に、ちょっと冷たく聞こえたかなと、先輩の顔を見る。

絶対聞こえてる筈なのに、先輩は聞こえない顔をした。
そして、直後にくしゃっと笑う。
「風呂上がりの恋人の顔くらい、見たいだろう」
「誰が恋人！」
反射的に言い返して、結局一緒にロビーを出ただけなんだけど、ちょっとモノ思う部分はある。
なんて言うか、他人の表情を読むのが上手い人だ。

あたしが「しまった、ちょっと強い口調だった」と思ったのは、顔に出てた。
だから先輩は、咄嗟に聞こえない振りをして、笑ってみせた。
見かけよりも繊細に、相手を見てる。

たとえばあたしが本気で腹を立てたりしたら、この人はどんな反応をするんだろう。
いつものニヤニヤ笑いじゃない、真剣な顔をするんだろうか。
駐車場の中で隣を歩く先輩を、見上げる。
「送りましょうか？」
「疲れてる人は、帰って寝なさい。俺は歩いて十分もかからないんだから」
大きい手が、あたしの頭を掴んだ。
「ま、今に一緒に帰るんだし」
「だから、いつそうなったの？」
「俺はそうする予定なんだけどね」
「あたしにその予定はありません！」
さっきの見解、取り消し。

その1

親会社の柏倉さんと、仕事を離れて会うのは2回目だ。
つまり彼が見てるのはまだ、あたしの猫の皮だってことだけど。
彼もあたしに良い顔しかしてないだろうし、そうやって探り合うのは結構楽しい。
定時に会社を出て、お互いに都合のつく池袋で待ち合わせ。
食事して、ちょっとお酒を飲んで、当たり障りのない会話と、ちらちら見える下心。
見た目は悪くない、仕事の内容も知ってる、話題はそれほど薄くない。
時々「ウチの会社」の話が、お父さんの自慢をする小学生みたいに聞こえるけど、大会社に入るために努力したのだろうし、それなりのプライドもあるのだろうと納得する。

「ウチの会社内にいたら、篠田さんの競争率、高いだろうなあ」
都内じゃなくても男は居るんですけど。
大学生活を都内で過ごしたあたしに、都内に対する幻想はない。
この人にはまだ、それを言ったことはないけど、どこのイナカモンだ、あんた。
今時は情報も流通も、ストレスがある場所は少ないっつーの。
なーんて慣れない男に言う訳はなく、にっこりと笑ってみせる。

スーツの趣味も普通だし、会社は大きいし、何よりもあたしに興味を持ってる。
エスコートは上手で、突拍子もないこともしない。
これなら、もう何回か会って、なし崩しにオツキアイのパターンかなあ、なんてね。
柏倉さんも多分、同じようなことを考えてると思う。

それなりの年齢だし、仕事の繋がりもあるから、お互いに慎重に様子を見てる感じかな。
少なくとも、開口一番で「結婚しない？」なんて言う、どこかのバカとは違う。

「また、連絡していい？」
「はい、楽しみにしてます」
お約束の会話で手を振って、行儀良く別れる。
これがフツーだよ、先輩。
間違っても、いきなり「結婚することにした」なんて言わないよ。
でも、あのインパクトのせいで、先輩にははじめから、猫の皮はナシだった。

その2

翌日は先輩と、よさこいの練習をした。
「最近、トレーニングがお留守だあ。会費、もったいないなあ」
「悪いな、つきあわせて。でも、真昼間に踊りの練習ってのもなあ」
うん。休みの日の昼間に、公園で鳴子鳴らすのはイヤだ。
「いいけどさ。昨日はデートだったし」
口から出した後に、まずいこと言ったかなと思う。
でも、あたしと先輩は別に恋人同士ってわけでもないし、先輩の言う「結婚」だって、はっきり真実味はない。

「デートって、男と？」
「女の子ではなかったなあ。親会社の人」
いいや、正直に言っちゃえ。
「つきあってるの？」
「まだ、そこまで行ってない。候補ってとこかな」
先輩の冗談みたいなプロポーズより、あたし的にはまともな話だもん。
先輩は驚いた顔も傷ついた顔もしてはいないのだけれど、明るい顔でないのは確かだ。
それから、ちょっと考え込む形になった。

あたし、もしかしたら酷いこと言ったのかしらん。
でも先輩からは、つきあおうとか好きだとか言われたこと、ないんだよ。
いきなり「結婚しない？」なんて驚かせて、その言葉一本やりで、あたしの返事なんか無視してて。
もしかしたら、あれって真面目な話だったの？
プロセスをすっ飛ばした原口先輩の言葉は、どう考えても真剣味な

んて欠片も考えられない。

思いっきり見上げないないと視線すら合わない先輩は、どこをどう見ているのかまったくわからない。
不本意ながら抱っこされたとき、あまりの視界の違いに驚いた。
見える景色さえ、違うのだ。
―とりあえず、お互いを知りましょ。
―馬には乗ってみよってとこで、ひとつ。
―いいよ、納得するまで観察してくれて。
・・・言われてるじゃない、あたし。
知り合ってその上でって、ちゃんと言われてるじゃない。

「先輩？もしかしたら、気にした？」
「気にしなくて、どうする。俺が先に決めてるんだから」
「決まってないから！」
そうか。反射的に言い返してるから、肝心の部分を聞き逃してるんだ。
あたしの頭を鷲掴みにした先輩の手は、思いの外優しかった。

その3

帰りの車を運転しながら、自分でも考える。
原口先輩は、けして嫌いじゃない。
「結婚しない？」じゃなくて、普通に食事に誘われるとかメールアドレスを聞かれるとか、わかりやすい誘いの言葉なら、あたしもそれなりの心構えで対応してた筈だ。
あたしが軽く捉えて反発したのは、突拍子もないタイミングの言葉だったから。
あたしの反論を、先輩はいつもニヤニヤ笑いで受けるから、冗談みたいに見える。

ねえ、何を考えてるの？
あたしが他の男とデートするのを気にする程度には、本気だったんだね。
罪悪感は湧かないけど、迂闊だったなって気はある。
またスポーツクラブで会うだろうし、翌週踊りを教える約束もしてる。
今度は先輩がどんな人だか、もう少し注意を向けてみることにする。
恋愛に結びつくものかどうかはわからないけど、無駄に気を持たせたり傷つけたりする気はないもの。

自分の部屋の本棚の前に立ち、一番上の棚を見上げた。
読み終わって、多分読み返すことのない本が入っている場所。
熊の顔って、ほぼこの位置なんだよなあ。
踏み台に乗って出し入れする棚を見ながら、そこに原口先輩の顔を挿げてみる。
顎しか存在の主張はないじゃない。
先輩が見るのも、あたしの頭の天辺だし。

向き合おうと思わなくちゃ、向き合うこともできない場所。
今度は、ちゃんと顔を見て話そう。
表情さえ見えていれば、こんな風に考え込まなくても理解できることがある筈。
思いっきり見上げる首は、疲れるけど。

その4

ボクササイズのクラスを終えて、お風呂に向かう途中で原口先輩に会う。
通路にいると、余計に大きく見える。
「今日はマシンじゃないの？」
「うん。お風呂に入って帰る」
「俺はこれからサーキット。タイミング悪いな」
あたしに向かって話すとき、熊は膝に両手をつく。
保育園で幼児と向き合うときって、しゃがんでも幼児の目線より上なんじゃないだろうか。

「待ってようか？」
自分の口から意外な言葉が出た。
「いつも先輩が待ってるんだもん。たまには、あたしが待とうか」
意味がわからないといった顔で、原口先輩はあたしを見返した。
それから、やっぱり笑う。
「いいよ、気なんか遣わなくても。それとも、待っていたい？」
「誰が！」
つい、反射的に言い返す。原因はこれだ。
目尻にいっぱい皺を寄せた先輩は、あたしの頭にポンと手を置いて、トレーニングルームに向かって歩き出した。

んん、微妙。あたしは別に、話はないんだけど。
前回、他の男とデートしたって言った時の、先輩の反応がどうも引っかかるのよね。
片一方がつきあってる気分になっちゃって、思い込みで嫉妬して逆上するってパターンは時々あるけど、どうもそんな感じじゃなかったし。

強いて言えば、その後気にし続けてるか知りたいってとこ。
あたしがそこに気を遣う義理なんか、まったくもって全然ないんだけど。

そんなこと考えながらぼーっとお風呂に入って、髪乾かして、ついでに一緒にレッスン受けた子とショッピング情報なんか交換してたら、時間が経った。
そろそろ熊がマシントレーニングを終える時間。
待っていたかったなんて思われたくないし、だけどちょっと気になるし。
ロッカールームで逡巡して、また時間を食う。
結局、フロントで遭遇しても、ちっともおかしくない時間になってしまった。

うう、会いませんように、なんて祈りながらフロントに鍵を返していると、後ろから威圧感のある気配。
振り向かなくてもわかる筋肉。
「お、やっぱり待っててくれた？」
「今、帰るところです！」
まあまあ、なんてラウンジに連れて行かれて・・・あ、やばい、眉描いてない。
「よさこいの指導料代わりに、お茶でも」
「安っ！」

その5

夜の公園で待ち合わせなのに、毎度のことながらジャージ着用。
熊と色っぽいことをする気もないけどね。
原口先輩の筋肉は、専ら重いものを担いだり走ったりするためのもので、踊るためのものじゃない。
「手首が硬いから、もっとこう」
一緒になって踊っているうちに、結構な汗をかく。
「篠田、細いのに意外にタフだな」
「この踊りは、疲れないで進めるようにできてるのよ。変なところに力が入ってるんじゃない？」

ベンチに座ってスポーツドリンクで給水する先輩の横に立って、あたしも給水する金曜日の晩。
先輩は翌日も仕事だと言う。
「もうじき、梅雨に入るもんなあ。公園で練習ができなくなる」
「お祭りは8月末じゃない。急がなくても」
「保育園の夏祭りで、子供たちと踊るんだ」

狭い園庭で子供たちが鳴子を鳴らしながら踊るのは、想像しただけで可愛らしい。
その中に立つ原口先輩は、秋刀魚の中の鯖どころか、シシャモの中の鯖だろう。
「だから、後ろ向いて笑うなって」
腰を引っ張られたと思ったら、先輩の膝の上に座っていた。
子供じゃないんだから、そう軽々と持ち上げたりしないで欲しい。
「軽いな」
すぐに降りようと思ったんだけど、あたしの腰に腕がまわっているのだ。

膝っていうより太ももの上、あたしの顔は先輩と垂直方向だ。
「こうしないと、篠田と同じ高さにならない」
先輩の満足そうな目尻の皺を、横目で見る。
背中から腰を支える太い腕の、とんでもない安定感。
この感覚を一言で言うなら「反則」だ。
その気がなくても、雰囲気に呑まれそうになる。

「先輩、ちょっと手を離して欲しいんですけど」
「ん？クッション悪いか？」
・・・じゃなくって。あたしに向ける先輩の顔が近すぎて。
「熊に喰われそうな気がする」
「美味い物は最後にとって置く性質なんだ。でも、味見くらいはさせとけ」
空いていた筈のもう片側の手が、あたしの肩を押さえた。

うわ、ちょっとちょっと待って！
顔を寄せられても、あたし、その気はまったくないんですけど！
でも、夜の公園で膝抱っこのシチュエーションで、しかも揺るぎない安定感。
「ん・・・」
すっごくロマンチック、だ。

「どうも本気にしてないみたいだから、ちゃんと宣言しとこうと思って。俺は篠田と結婚するから」
「結婚って、片一方が宣言してもできないよ、先輩」
「だから、その気になってもらわないと」
まだ膝の上のまま、唇にキスの感触は残ったままで、ちょっときまり悪い。
「とりあえず、冗談ではないと理解すれば良いのね？」

「そういうこと」

その1

出社してロッカールームで靴からサンダルに履き替えたら、同僚の橋本さんに声をかけられた。
「システムの柏倉さんとつきあってるんだって？」
「つきあっては、いないと思う。2回だけ、ご飯食べに行った」
「2人ででしょ？それはつきあってるって言うんじゃない？」
男と2人でご飯食べただけで「つきあってる」なら、あたしは今まで何人の男と「つきあった」ことになるんだろう。
時々、こういう考え方の人もいるなあと思う。

「ってか、あたし、そんな話誰かにしたっけ？」
「柏倉さん本人から聞いたよ。昨日、私、本郷に出張だったじゃない」
本郷っていうのは親会社の場所の地名で、システムの細かい変更とか商品ルートの変更だとかで、時々内勤も研修に出かけて行く。
「近いうちにまた誘いますって伝言。おとなしい人だからって言ってたけど」
そう言いながら、橋本さんは笑っちゃってたけど。
「ずいぶん見た目で騙したねえ。つきあうんなら地を出さないと、後からびっくりだよ」
「いや、あたし、おとなしいし」

答えながら、全然関係ない同僚にプライベートを話す柏倉さんに、少し腹を立てた。
背広を着てるから人づきあいがスマートなわけじゃないっていうのは、重々わかっていることなんだけれど、社会人同士なんだから、世間話みたいに自分の行動を話したりするもんじゃない。
まして、これから進展しないかもしない間柄なのに。

子供っぽいのか間抜けなのか、それとも女と会うことに慣れていないのか、マイナス点であることに変わりはない。
ちょっといいな、なんて思ってたんだけどなあ。
彼が見てるあたしの猫の皮は、ずいぶん子供っぽい色合いらしい。

当の本人から、その晩メールが来た。
とりあえず、もう一度会っとくことにして、待ち合わせをする。
見極め3回はセオリー通りだもんね、ちょっと惜しい気もするし。
社会人の出会いの場所なんて、学生さんより限られてるんだから、機会は有効に使わなくちゃね。
とは言っても、目の色を変えて男を探してるつもりなんかないから、気が合う・合わないは冷静に。

平日の晩に池袋ってあたりが、あたしの警戒心なのだと柏倉さんは理解してるかな。
いざって時に「明日仕事だから」ってお断りしやすいように、なんだけど。
待ち合わせの人でいっぱいの『いっぱいテレビ』の前に立ったあたしは、わかりやすい女の子服で（それが一番似合うって理由だけど）雑踏の中に埋まっていた。

その2

あたし自身は埋まっていたのに、雑踏からポンと飛び出た頭を見つけた。
大きい人ってどこにだっているし、髪が短めな人だって珍しくない。
大体、平日の晩に保育士が繁華街を歩いてる筈は・・・あるんだね。
しかも、ジャージやジーンズじゃなくて、ワイシャツ姿で。

絶対に見えないと思ったのに、熊はまっすぐ私の所に歩いてきた。
「篠田？どうした、こんな所で会うとは思わなかったぞ」
「先輩こそ、なんで平日にここにいるの？」
「今日は休みだったんだ。子供たちが好きな絵本の作家が個展やってな。他にもついでがあったから、出てきたんだよ」
「あたしに、よく気がつきましたね」
「そりゃ見慣れた頭頂部だから。で、篠田は？」
えーと。何て答えて良いものか。

「篠田さん、お待たせしちゃって」
迷っているうちに、答えにくい待ち合わせ相手が到着する。
「ふうん？」
あたしに合わせて屈めていた腰を伸ばして、先輩は柏倉さんを見下ろした後、あたしを見下ろした。
まずいまずいっ！別に先輩に義理立てするつもりはないんだけど、これはあきらかに気まずい。
何も知らない柏倉さんは、曖昧な笑みで先輩に頭を下げた。

「あ、じゃあ、先輩、またねっ！」
とにかくその場を離れなくてはならない。
柏倉さんの腕を引っ張るように動き出すと、後ろから先輩の声がし

た。
「篠田っ！」
振り向くと、ニヤニヤ笑いじゃない先輩が、憮然とした表情でこちらを見ていた。
「忘れんなよ」
忘れてませんて。ただ、あたしの意思はそこにはないんですって。
・・・でも、怒った？怒らせた、あたし？

その3

「ずいぶんゴツい人だね」
向かい合った洋風居酒屋で、柏倉さんは原口先輩の話を出した。
「高校の先輩なの。スポーツクラブが一緒で」
嘘じゃない。
「日焼けもすごいし、ガテン系の人？」
ガテン系の人が、お金払ってスポーツクラブで筋トレすると思うか。
意外にバカだね、柏倉さん。
「あの人ね、保育士。保育園の先生」
柏倉さんは、口に運ぼうとしていたバジルチキンを箸から落っこと
した。

「保母さん？男の仕事じゃないでしょう？いるんだ、そういう人」
「保育科に男子が入学できるんだから、当然いるんじゃない？」
「そういうのって、競争社会で生き残る力のない人が、選ぶ職業じ
ゃないのかなあ」
何言ってんだ、こいつ。
「やっぱり男は、熾烈な社会生活に揉まれて一人前っていうか」
システム部で熾烈な社会生活に揉まれてるってか、バカ。
あんたの会社が管理するシステム、子会社では使いにくいって評判
だよ。

あたしの不機嫌に気がつかず、柏倉さんは料理を口に運ぶ。
「今度はさ、休みの日に映画に誘っていいかな」
フランス映画のリメイク、しかもハリウッドもののタイトルを出さ
れて、不機嫌なまま返事をする。
「あたし、それは元の映画見てる。アメリカでリメイクして、スト
ーリー性が上回るとは思えない」

「でも、面白いって評判・・・」
「宣伝にお金かけたからでしょ。元の映画は単館でも話題になったけど、そっちは宣伝しないと売れない」
柏倉さんは驚いた顔であたしを見た。

「普段、どんなところで買い物したりしてるの？」
気を取り直した柏倉さんが、どうにか口を開く。
「地元よ。まあ、都内まで1時間かかるところじゃないし、不自由はしてないもの」
「篠田さんのセンスが都会風だなあと思って」
だーかーらー。あんたはどこのイナカから出てきたの？
まさか、流行の商品を買うために、新幹線に乗るような場所じゃないでしょうね？
うう、口がムズムズする。

「ウチの会社は一部上場だから、親が毎日新聞で株価チェックしてね、下がると電話かけてくるんだ」
「だから？」
「もう少し小規模な会社のほうが、息子としては気楽だったかなあ、なんて」
「株価が上がっても、柏倉さんの手柄じゃないのにね。イヤなら、転職すれば？」
あーあ。猫の皮は背中に少し残すのみになってしまった。
「篠田さん、意外にはっきりしてるんだなあ。はっきりした子って、いいよね」
あんたは意外に間抜けだけどね。ばいばい、柏倉。

その4

「帰らなくちゃいけないの？」
ほら来た。きっぱりどうでも良くなっちゃったあたしは、即答する。
「明日仕事だし、柏倉さんとはそういうオツキアイじゃないでしょう？」
「そういうオツキアイのつもりだったんだけど」
「じゃ、見解の不一致ってことで」
手を振って歩き出そうとしたところで、肩を掴まれた。
引き際の悪い男、ますますマイナス。

「あのね、仕事上の繋がりもあるでしょう？ゴタゴタしたくないの、悪いけど」
「3回も会っといて、そりゃないんじゃない？親会社勤務で、マンション買ったばっかりなんて条件、いいだろ？」
ああ、またそれを持ち出すか。
スーツの趣味は普通、話題も薄くない、だけど後ろにあるプライドは薄っぺら。
「肩、放して。マンションの頭金は親に出してもらったって言ったわね。それが自慢になると思ったら、大間違い」
少し酔っている柏倉さんの顔つきが変わった。
「タダメシ食ってたんだから、一晩くらいいいだろ？」
安く見られたもんだ。

「今までの食事代、返却しましょうか？」
財布を出して、大急ぎで一万円札を柏倉（敬称なんて、もうつけない）のスーツのポケットに突っ込み、後ろを向いて走り出した。
追いかけては来ない、つまり納得して受け取ったんだ。
改札を抜けた時、あたしの息はきれていた。

ああ、怖かった、そう思ったら泣きたくなった。

あたし、食事代を払ってくれなんて、言ったことない。
あたしが財布を出すたびに、柏倉は「僕が誘ったんだから」と固辞していたのだ。
それが最終的には「奢ったんだからやらせろ」だあ？
あたしが彼に好意を持ったままなら、別に問題はなかったのかも知れないけれど、見えちゃったアラはクローズアップするばっかりだ。
同じくらいのタイミングで失望できると良いんだけれど。

原口先輩が同じ状況ならば、多分あんな風に怖い思いはしない。
彼なら、あたしがきっぱりお断りをすれば、無理強いするような言葉は言わない筈だし、自分の意思で女の子に食べさせたご飯の見返りなんて、口に出したりしない。
あたしを追い詰めて結論を出させようとしないで、あたしの表情を観察している人だもん。
そうか、あたしは先輩をそうやって、信頼してるわけだ。
・・・怒ってるかなあ。
怒らせるのが怖いのは、嫌われたくないからだってことくらい、自分でもわかってる。

その5

ボクササイズのクラスが終わって、スタジオから通路に出たあたしの目に飛び込んできたのは、仁王立ちの熊。
疚しいことなんて何一つないのに、逃げ出したくなった。
別に怒った顔をしているわけでもないけど、目尻に皺は寄ってない。
「ロビーで待ってる」
あたしの身長に屈みもせず、筋肉の威圧感。
ねえ、やっぱり怒ってる？あたし、悪いことなんてしてないんだけど。

大急ぎでお風呂に入ってロビーに出ると、ラウンジじゃなくて外に出ようと言う。
それでも身の危険を感じないのは、この人が自分に害を為す人じゃないと信じられるからだ。
「あたし、別に話なんてないんだけどな」
「そんなに長くない。駐車場の隅っこで」
しぶしぶ一緒にフロントに鍵を返して外に出る。

「あれと、つきあってるの？」
あれってのは、柏倉（あくまでも敬称はない）のことだよね。
「つきあってないよ？もう、ふたりで会うこともないしね。この前で、多分最後」
駐車場の隅の縁石の上に座って、隣の縁石に座る先輩の顔を見る。
「ああいう真っ当なサラリーマン風がいいのか？」
「んー・・・こだわりはない。スーツ萌えでもないから」
率直に話せるのは、本当に疚しい所がない証拠なんだけど。
先輩の真剣な顔を見るのって、もしかしたら初めてかも知れない。

「あの日、ちゃんと帰ったのか」
帰ったけど、これに答える義務はあるんだろうか。
黙って顔を見ていたら、先輩は大きく溜息を一つ吐いた。
「・・・俺だけが決めてるんだから、仕方ないんだけどさあ」
そして大きな身体を折り曲げて、自分の両足首を掴んでみせた。

可愛らしい仕草と言えないこともないんだけど、この姿はどう見ても。
「ボリショイ大サーカス」
つい、口から出てしまった。
顔を上げた先輩と目が合う。
「熊の曲芸にしては、地味だね」
あたしって、この人には本当に遠慮会釈なしだよなあ。

「ちゃんと帰った。もう、ふたりだけで会うこともない。以上、他にコメントなし」
聞きたいのは、これだけなんでしょう？
何かあたし、悪いことしてるみたい。
でもね、先輩のつむじを見ながら気がついたことはあるんだよ。
待ち合わせ場所に先輩があらわれなければ、柏倉のアラのクローズアップは、もう少し後だったんだと思う。

その1

梅雨に入ったので、先輩に踊りを教える機会がなかなか無い。
あの後、先輩は何事もなかったように、何考えてるのかわからない人に戻ってしまった。
休みの日に、今度はちょっと下り方面の美術館に出掛けた。
原爆の図で有名なその美術館は、小学校の時に行ったことはあっても怖ろしい印象しかなくて、その後にプライベートで行ったことはなかった。
先輩も同じだと言ったけれど、そこに誘ったってことは興味があるからだと思う。

真剣に原爆の図を見る先輩の顔を、下から窺う。
よく見えないけど、痛々しげだったり悲しげだったりの百面相だ。
直視したくない、けれど直視しなくてはいけない絵に囲まれて、あたしも胸が苦しい。
いろんな感情を揺さぶられて、横にある太い腕に思わず手をかけた。
「ん？どうした？」
いつも通りに腰を屈めてあたしの表情を確認する。
言えません。心細くなって、つい縋ってしまったなんて。

ああ、この人は保育士さんだ。
こんな大きな男の人が保育園に居たら、子供たちは怖がるんじゃないかと思ってた。
「人間ってのは想像力失くすと、非道いことができるもんだな」
あたしの頭にポンと手を置いて、先輩は柔らかい顔をした。
「辛かったら、出るか？」
仕事場での顔が見える。
子供たちは先を争って、先輩の背中にしがみついているに違いない。

あたしの背中全部を覆ってしまうんじゃないかと思える、大きな手に押されて、あたしは展示室を出た。
降り出した雨のせいで庭を見て回ることはできずに、先輩の小さな車に戻る。
「名物の焼き鳥でも食うか？」
この辺の焼き鳥は、豚のカシラ肉を辛味噌で食べるのだ。
「ビールが欲しくなるから、いい。先輩運転しなくちゃならないし」
結局道なりのファミリーレストランに落ち着き、改めて向かい合わせに座った。

「そうか、篠田に酒飲ませたことはなかったな。酔うとどうなるの、静音サンは？」
「あんまり変わらないと思う。昭文サンはどうなの？」
名前で呼ばれたから、ちょっとお返し。
先輩は顔をくしゃくしゃにして笑った。
「確認すればいいじゃん。次は、飲みに行ってみよう」
また先輩のペースに持って行かれてる。
でも、いいや。

その2

梅雨の合間を縫って、先輩と夜の公園で待ち合わせた。
「もう、動きは覚えたよね。あとは鳴子を握り締めないようにすれば大丈夫」
ネットで取り寄せたっていう、あたしよりもふたまわり大きい鳴子は先輩の手によって、きっちりと握られている。
「そこに力入れちゃダメだって。親指と人差し指で挟むだけ。残りの三本の指は鳴らすときに打つのよ」
「踊りながらそんな器用な真似、できない。篠田、よくできるな」
「あたし、折り紙は折れないよ、先生」

先輩の手を掴んで鳴子を持たせて、あたしの手を上から添えて指はこう、と形を教える。
ね？と先輩の顔をふり仰いだら、慌てて目をそらす仕草が見えた。
何を見ていたのかと自分の胸を見下ろして、浅いVネックで上から見える筈はないと確認する。
気のせいだったかなと、もう一度指に目を戻して、打つ時の形はこう、と教えてもう一度先輩の顔を仰ぐ。
そして、最近めっきりご無沙汰だった表情に、　やっと気がついた。

「先輩、照れてる？」
ウウとアアの中間くらいの声が、先輩の喉の奥の方で聞こえる。照れる熊！
「篠田の手、小さいな」
「先輩の手が大きいんでしょ？」
あたしのこと勝手に抱っこしちゃうくせに、手を触ったくらいで照れるのはおかしいでしょう。
面白いので顔を見続けてしまうと、先輩は上を向いた。

「まったく、他人の感情を噛んで振り回すような真似しやがって」
ふいに、足が地面から浮いた。瞬間、状況が確認できなくて固まった。
気が付いたらすっぽり先輩の胸で、腰に巻きついた手に握られた鳴子があたって、痛い。
「どんだけ抑えてると思ってんだ。目の前で男と待ち合わせするし、頼りない顔で腕に掴まるし」
「ちょっと待って！鳴子、あたって痛い！」
ああごめん、と手を離す程度に冷静だ。
びっくりした、今までそんな気配見たこともなかったし。

「別に、先輩の前で待ち合わせしたわけじゃないもん」
「あの晩、よっぽどメールしてやろうかと思った。返信がないと余計に気になりそうだから、やめた」
そういった後、不便だなと呟いて、膝立ちになった。
膝から下がなくなって、やっと同じ目線になる。
「やらせてないよな？」
見事に直球な質問。
「その質問に答える義理はないけど、してないです」
答えた後に、ちょっとだけ考えて付け足したのは、サービス半分。
「先輩の方が、男としてのレベルは上だよ」
残りの半分は、本音だった。

その3

石畳に座った先輩の横に、腰を下ろす。
ベンチはすぐそこにあるんだけど、場所を移そうなんて言い出すのも、変な感じ。
「考えてみれば不用心だな、篠田は。担いで繁みで押し倒すぞ」
「先輩は、そんなことしないでしょ？その程度には信用してるのよ」
後ろ手に手をついて空を見上げた先輩は、ちょっと子供っぽい表情。

「なんでいきなり結婚とかって言ったの？」
横だと顔を見せなくていいから、ちょっと聞いてみる。
「そこに至るまでのプロセスは、どうでもいいわけ？」
「答えなくちゃいけないか？」
珍しく、口籠る熊。
「それを聞かないと、あたしは意味が理解できない」

両手で自分の頭を掻き毟った先輩（短髪だから、ぐしゃぐしゃにはならない）は、こちらを見ないで口を開いた。
「手元に置いときたいと思ったんだ」
一瞬、意味が把握できずに考えてしまった。
あたしが口を開かないので、先輩は自棄になったように続けた。
「好きとか可愛いとかより先に、手元に置きたいと思ったんだよ」
手元に置くって、人形じゃあるまいし。

「何？手元に置くって、床の間にでも飾っといてくれるの？」
これは、ちょっとした照れ隠し。
「床の間のあるような家に住んでないから、床に入れとく」
間髪入れずに戻った返事は、結構なRコードだ。
「・・・そういうこと、考えてました？」

「考えられないような女と、結婚する気はない」

大きな身体に似合わない素早さで、熊はあたしを懐に抱えた。

「本当に不便だな、これ。顔の位置がぜんぜん合わない」

ぶつぶつ言いながら、無理矢理身体を折り曲げようとする先輩に、ちょっとだけ顎を持ち上げて、ご協力。

「つきあってください」なんて言葉よりも強烈な「手元に置いときたい」に、思いの外感動しちゃったっていうのは内緒だけど、キスくらいはしちゃいたい気分。

その4

「そういえば、まだ返してなかったな」
「何？」
「黒いレースの傘」
黒いレースの晴雨兼用の傘、確かに貸した記憶はある。

――ないよりマシでしょっ！暗いんだから、誰も気にしないわよっ！
春先の急な雷で、スポーツクラブのロビーには、人が溢れていた。
クラブの貸し出し用の傘は全部出払ってしまい、家族やタクシーの迎えを待つ人だらけだ。
あたしは車だし、お風呂に入ったばかりだとは言え、家に帰ればシャワーを浴びなおすことができる。
それより、車の中に何本か傘を持っていた筈。
バケツをひっくり返したような雨の中、駐車場を突っ切って車に乗せた傘を出して、ロビーに戻った。
歩いて帰るのに困っている人に貸してやってくれとスタッフに渡して、自分用の傘を広げようとした時、頭にスポーツバッグを乗せて走り出そうとした先輩が見えた。
――先輩、車じゃないの？
――近いから、歩いてきたんだ。大丈夫だ、十分とかかんないから。
まだ、ジャージの上に上着を羽織る時期だった。

そうだ、女物の小さな傘を先輩に無理に持たせた。
――それ、母から誕生日プレゼントに貰ったものだから、返してね。
――そんな大事なもの、貸してくれなくてもいいよ。持つの恥ずかしいし。
――それで先輩が風邪ひいたら、あたしは寝覚めが悪い。
押し問答の末、冒頭のセリフに至った。

――篠田だって車まで傘が必要だろう。
――車でヒーターつけるから、平気！
大雨の中、髪から雫を滴らせながら車のキーを開け、風邪をひいたのはあたしの方だった。

「篠田って、自分がこうしようと思うと、後先考えないだろ」
うん、そうかも知れない。って言うか、そう。
「女の子を雨の中走らせて、自分は傘持って帰ったんだぞ。しかも、レースの」
４５センチの傘、黒とはいえレース。
自分が無理矢理貸したのに、それを差す熊の姿を、今頃想像した。
「笑うなよ。すれ違う人がみーんな俺の顔と傘見比べてるみたいで、すっげー恥ずかしかったんだから」
そう言いながら、原口先輩自身も笑ってるけど。

「今度、忘れないで持ってくる。あんな雨で、本当は走りたくなかったんだ。ありがとうな」
でもな、と続いたけど。
「自分が良いと思っても、自分の負担になるようなことはするなよな。相手が素直に喜べなくなるから」
「はーい」
良い子のお返事をしてみせる。
きっとまた、同じことをするんだけどね。

その5

先輩とお酒を飲みに行ったのは、その後のことだ。
先輩の勤め先には男の保育士さんが何人かいるみたいだけれど、仕事を離れてお酒を飲むことはあまりないと言う。
「保育士同志って、お酒の席でどんな話するの？」
「普通だよ。仕事の話とバカ話、半々。男同士だとシモネタに走るし」
「ロリコンの保育士とかっていないの？」
「産婦人科医が助平だと思うか？」
まあ、それはそうだけどね。

あたしは実は、結構強い。
色が白いのが幸いして、顔が上気すると、周りの人は酔っていると思ってくれるから、あんまり無理強いされないお得なタイプだ。
だから普段なら、潰れることも記憶をなくすこともない。
先輩がどういうタイプの酔い方をするのか、じっくり観察してやろうと思う。

土曜の晩に待ち合わせて、居酒屋に行く。
気を張る相手じゃないし地元だしで、ジーンズ着用だ。
「なんだ、この前みたいに女の子っぽい格好じゃないんだ」
ああ、柏倉と待ち合わせしてた時のことか。
「先輩と会うのに、おしゃれなんかしません。普段ジャージで歩いているような場所だし」
ちょっとがっかりしてるかな。でも先輩だって、Tシャツにジーンズじゃない。
途中で顔馴染みとばったり会ったり、知らない店ができてるなんて

言い合ったりで、地元のお気楽ムード満載。
これでデート仕様じゃ、却っておかしいんじゃないかと思う。
チェーンの居酒屋に腰を落ち着け、まずはビールで乾杯。
「何に乾杯？」
「とりあえず、はじめて一緒に酒を飲むってことに」
メニューを広げた先輩は、あたしの食べる量の三倍くらいを、一度にオーダーした。
「まずは、こんなとこかな」
「え？余るくらい頼んだじゃない」
「篠田の倍の身体を維持するんだぞ。しかも、ガキ相手の肉体労働だ」

あたしの弟も、あたしに較べれば食べる量は格段に多い。（大きくならなかったけど）
会社の宴会では誰が何を食べてるかなんて知らないけど、男の子とご飯を食べに行っても、よく食べるなーくらいの感慨はある。
だけどこれは・・・うーん。次々と運ばれる料理を見ながら、驚嘆する。
身体の大きさが違うって、使うエネルギーも違うってことだ。
「篠田、ずいぶん食が細いな」
「あたし、熊じゃないもん」
ビールからチューハイに切り替えた先輩は、機嫌良く笑った。

その6

よく食べて飲む人だ。
酔ってくると口数が減って、にこにこするだけの人になるらしい。
機嫌の良い酔っぱらいは好きだ。
最後に甘いものでも食べちゃおうかなあ、なんてメニューを検討して、顔を上げると目が合った。
「言ったことあったっけ？」
「何を？」
「篠田って、可愛いよね」
はい？なんですか？
他の男から聞いたことはあっても、先輩からは聞いたことのない言葉ですが。

「酔ってます？」
「ちょーっとね（と、親指と人差し指で尺を示してみせた。オヤジくさい）。でも、いつも可愛いぞ」
これはちょっと、調子が狂う。
「何が可愛いって、その向こうっ気の強さとか待ったなしの性格とか」
そっ・・・それは普段、欠点として並べられているものなんですが。
「先輩、潰れないでくださいね。あたし、先輩は担げませんから」
「潰れるほど酔ってない。大丈夫だ、無事に送って行くくらいの理性は残ってるから」
あの、あたしの家、歩くとたっぷり３０分はかかるんですけど。

「タクシーで帰るから、送ってもらわなくても。遠いし」
「いや、送る。酔い覚ましがてら歩こう」
「遠いってば」

「山超えるわけじゃないだろ？送らせろ」
ああ、先輩の中では決定事項なわけだ。いや、送らせるのは構わないんだけどさ、実家だし。
「今日、スニーカーじゃないし」
「疲れたら、背負ってってやる」
何を言っても無駄ですか？決めちゃってるんですね？

仕方なく一緒に歩く夜の道。あたしの家とは方向の違う先輩は、多分往復1時間以上。
「先輩だって、帰りが遅くなるばっかりじゃない」
「遅くなるより、名残惜しい方が上」
ご機嫌さんな声だなあ。
延々と歩く道は、大きな通りから少しそれると、長閑な住宅街になる。
歩いている人なんて、もうほとんどいない。

「篠田」
ふいに立ち止まった先輩が、いきなり呼ぶ。
ん？と振り仰ぐと、顔がびっくりするほど近くにあった。
「本当に不便だな、不意打ちもできない」
両頬を手で挟まれて、意図がわかった。
いいよ、少なくともイヤじゃないから。
キスしながら背中に回った掌は、どっしりした安定感だ。
「名前で呼ばせろ、静音」
拒否しないことが肯定の返事だって、先輩はわかっているかしらん。

その7

「ザリガニって、あの赤い・・・」
「青いザリガニも売っちゃあいるけど、その辺にはいないな」
梅雨も終わりかけのある日、先輩に誘われたのはザリガニ釣りだ。
何故、ザリガニ。
「保育園の夏祭りで、ザリガニ釣り担当なんだ。目標、１００匹」
「買ってくればいいじゃない！」
「そんな予算、ないの。お菓子と飲み物だって、量販店で買ってきてチケット売るんだから」

ちょっと街を出れば広がる田園風景。
母の庭仕事用の、布の垂れた麦藁帽子と、ＵＶカットのパーカー着用。
イカの燻製を糸に括りつけ、農業用の溜池の淵に腰掛けるあたしと熊。
まさか、２０代も半ばになって、ザリガニ釣りをするとは思わなかった。
先輩はクーラーボックスの中に、ペットボトルとサンドウィッチを持参したピクニック仕様だ。

ザリガニは面白い程簡単に釣れた。
子供の頃に何度か、釣ったことはある。
梅雨の晴れ間にしては、晴れ上がった日だ。
「あっつぅ・・・」
Ｔシャツの袖を肩にたくし上げ先輩が、太い腕をむき出しにして、せっせとザリガニを釣る。
「子供たち、喜ぶといいねえ」
「喜ぶさ。俺も子供の頃、ザリガニが好きだった。子供の本質って

のは、そんなに変わらないよ」

「うわ、二匹もいっぺんに釣れてる！」
「どれ、貸してみろ。ああ、大物だなあ」
あたしの後ろから屈みこんだ先輩の肩越しに見えるのは、きれいな青空。
目尻にいっぱい皺を寄せた先輩が、あたしから糸を受け取る。
この顔、いいなあ。

大きな衣装ケースに釣れたザリガニを入れて、先輩の持ってきた昼ごはんを一緒に食べる。
「ふたりだと、さすがに早いな。助かった」
「別に、あたしの意思じゃないもん。でも、結構楽しかった。汗だらけだけど」
隣に座ってる先輩の顔は、気持ち良いくらいの上機嫌。

「こういうの、汚いとかダサいとかって言わなかったな」
「え？」
「ザリガニ釣りなんてくだらない、とは言わないね」
くだらないなんて言ったら、子供の頃の自分や、楽しみにする保育園の子供たちの否定になるじゃないの。
「そう言われたことがあるの？」
「保護者の中にはね、そう言って子供にさせない人もいるの。静音がそうじゃなくて、良かった」
肩に手を回されると、暑い。
寄りかかっても揺るぎもしない肩に頭を預けて、やっと名前を呼び捨てされることに、納得する自分がいた。

その8

ザリガニ入りの衣装ケースを載せて車で送ってもらう途中、ウトウト眠くなった。
時間にして１０分そこそこの場所だ。
「おい、到着」
知らない駐車場を見回して、どこなんだろうと首を捻った。
「俺のアパート。先にザリガニ降ろしてから送るから、ちょっと寄ってけ」
男のアパートに無防備に入るほど、未経験じゃない。

「警戒するなよ、下心はないから。冷たいものくらい、飲んでけ」
車のエンジンを切ってさっさと歩き出しちゃった先輩の背中を、しばらく見ていた。
そのまま送らなくても良いからと帰っちゃおうかな、なんて思ったんだけど、そうすると下心を疑ってるみたい。
よしんばそうなんても、別にハジメテってわけじゃないし、酒のイキオイとかじゃないし。
自分で自分に言い聞かせ、動き出したのは先輩が駐車場を抜ける頃だ。

古いアパートの中は、こざっぱりと片付いていた。
男の一人暮らしなのに、服が脱ぎ散らかしてあったり雑誌が散乱していたりしない。
シャツを着替えた先輩が、ペットボトルのお茶とグラスを出してくる。
「暑かったのに、つきあわせちゃって、悪かったなあ」
「ううん。なんか懐かしくて、楽しかった」
エアコンのスイッチを入れ、先輩は大きく伸びをした。

「俺も楽しかった」

部屋の隅に、古い型のミシンがあった。
縫い物って、本当だったのか。
あたしの視線に気がついて、先輩もそちらを見る。
「実家で新しいの買ったって言うから、もらったんだ。けっこう便利」
あたし、ミシンなんて何年使ってないだろう。
そう言えば、持ってきたサンドウィッチも買った風じゃなかった。

「先輩って、もしかしたらすっごくマメ？」
「エンゲル係数が高いから、自炊は必須なんだ。縫い物はオプション。いい買い物だろ？」
「確かにね」
女の子なら、可愛い奥さんに欲しいタイプかも。
フリルのエプロンで、「おかえりなさーい」なんてね。
自分の連想に吹き出し、先輩の顔を見たら笑いが止まらなくなる。
「そんなにおかしいか？」
「いや、他の連想っ・・・」
駄目だ、言葉が続かない。

その9

「まったく、俺が何かするって言うたびに笑う人だな」
「だって、見た目は熊なのに」
悪いけど、笑いが止まらなくてむせかえる。
しょうがないなーなんて言いながら、先輩も怒った顔じゃない。
「意外性があって、飽きなくていいだろ」
エアコンが効いてきて、部屋の中の空気が気持ち良い。

板張りの引き戸で区切られて、もうひとつ部屋がある。
そちら側は寝室だろうか。
そう思ったら、急に落ち着かなくなった。
別に、先輩があたしの肘を掴んで、そこに引っ張り込むなんて想像をしたわけじゃない。
えっと、今日、下着何つけてたっけ。
違う違う！見せる気なんてないんだってば、汗いっぱい掻いてるし！
・・・汗臭くなければ良いとでもいうの？そんなわけあるか。

先輩の腕が急に伸びてきて、思わずびくっと反応してしまった。
「お茶、もう一杯飲む？」
「あ、ありがと」
グラスを渡して、明後日の方を向く。
あ、やだ、あたし今、すっごく不自然。

「なんだか、そわそわしてんなあ」
ニヤニヤ笑ってる先輩の顔が急に視界から消えたと思ったら、真横にあった。
「下心はないって言っただろ？俺、気は長いんだ」
それならば、肩にかかってる腕は一体何なのでしょうか。

「静音はまだ、迷ってるもんな。それは構わない。どうせその後、何十年もあるんだから」
「何十年もっていうのこそ、決まってないから！」
「決まってんの」

先輩の腕があたしの腰を引き寄せ、顔が覆いかぶさってくる。
何度も掠るだけの唇に焦れて、先輩の首に腕をまわしたのはあたしだ。
もう少し、深く触れてもいい。
閉じた目の奥で、さっき肩越しに見た青空が蘇る。
熊には乗ってみよ、人には添うてみよ。
とりあえず、はじめてみよう。
先輩の部屋から出て車で送ってもらう最中、あたしは次の待ち合わせを先輩に提案していた。

その1

梅雨があけて、本格的に夏仕様のお天道様が威張っている。
「森林公園のプールにでも行く？」
「日焼けするから、やだ」
「夏は日焼けするもんだろ」
「それは１０代まで！」
日傘を広げながら、ファミリーレストランの駐車場を歩く。
「じゃ、デイキャンプ。川で少し水遊びして、バーベキュー」
紫外線量から言えば、どっちこっち言えないと思うけど、ちょっと心惹かれるプランだ。
「水着にならなくて、いい？」
「いいけど、着替えは何枚か持ってるほうがいいよ」

そんなわけで、簡易バーベキューセット（先輩が、ガスの小さいセットを持っているという）と、肉・野菜入りのクーラーボックスを車に積み込み、場所取りのために朝６時に出発する。
場所自体は近いので、駐車場に入ったのは８時少し前、管理人さんが出勤してきたのと同時に入場する。
「眠・・・」
木陰にレジャーシートを敷いて川の音を聞いていたら、やけにのんびりした気分になった。
「朝早かったもんな。今日は頭を空っぽにする日にしよう。眠いんなら、寝てもいいし」
デイキャンプ場はまだ、人がまばらだ。
これから何時間かで、人が溢れるんだけど。

午前中の涼しい日陰で気持ち良くウトウトする。
汗だらけで起きて川の水に足を浸すと、なんかとってもリゾート気

分。
気が付くと、まわりにたくさんのビニールシートや日よけのタープがある。
お財布も携帯もいらない場所、身一つって気楽だ。
ひょいっと身体を掬われて、水の中に投げ出されそうな予感に怯えて、先輩の首にしがみつく。
「力が強いからって、一方的に他人を水の中に投げ込むのは、反則っ！」

しがみついた先から、笑い声が漏れる。
「やめてーって叫ぶんじゃないんだ？怖がりながら、文句を言う」
足から水の中に降ろされて、膝下くらいの水深に安心したところで、肩を突かれた。
ばしゃんと派手な水飛沫を上げて、転ぶ。
「卑怯者っ！安心させといて水浸しにするっ！」

大笑いしながら手を差し出した先輩に、盛大に水を掛けてやる。
どうせびしょ濡れなんだから、構うことはない。
「悪い、シャツの色が薄かったな」
先輩が自分の着ていたオリーブ色のシャツを脱いで、あたしの頭に無理矢理通した。
あたしの薄い空色のシャツが、水に透けて下着の色が――
「このっ！」
あたしにはワンピースサイズの熊のシャツ。
「とりあえず、帰りに着替えるまで、それ着とけ。まだ水遊びするし」
「先輩は？」
「何枚も持って来てるし、ドカタ焼けの解消しないと」
背中にまでついた筋肉と厚い胸から、思わず目を逸らした。

その2

先輩の大きいシャツだけ着ることにして、もぞもぞと自分のシャツを脱ぐ。
コンロの用意をしてクーラーボックスを開けている先輩の背中には、汗が流れてる。
切り揃えて、焼くばかりになっている野菜。本当にマメな人だ。
「先輩って、実家にいるときから台所に立つ人だった？」
弟は料理なんて滅多にしなかったので、そんな男の人はいるのかと疑問に思っただけだ。
「いや、一人で住み始めてから。料理の上手な子に教えてもらって」
言いかけてから、しまったって顔をしたので、理解してしまう。
ああ、前の彼女が料理上手だったわけね。

「ミシンの使い方も教えてもらったわけ？」
「いや、小学校の時に家庭科で使っただろ？」
興味津々風に顔を見ちゃうけど、実は面白くない。
この前は先輩の作ったお弁当を食べて、今は切り揃えてもらった野菜に火が通るのを待ってる。
お料理上手でミシンの使い方を教えられる女の子と、見た目だけ女の子らしいのに、中身はがらっぱちのあたし。
女としての格上は、絶対に前者だ。
「肉、焼けてきたぞ。タレと塩、どっちで食う？」
「塩。ビール、出して」
コンロの前でトングを使いながら、腕を伸ばしてクーラーボックスを開け、「手がかかるな」と先輩は笑った。
ビールを受け取ろうと腰を屈めたら、ニヤッとした顔が向いた。
「何かのサービスか、それ」

「何？」
「淡いピンクは可愛いけどな、臍まで見えたぞ」
忘れてた。大きいＴシャツって、襟ぐりも大きいのだ。
「それは次の楽しみだから、今日のところはしまっとけ」
「次はないっ！」
「そんなわけ、ないだろ。聖者じゃあるまいし」
そう、だよね。あたしも、ないとは思ってないもん。

あたしの外見じゃなくて、性格が気に入ったという。
本当に？どんな風に？
少なくとも、あたしは先輩の人の良さそうな笑い方とか、あたしが焦らないように急かさないでいてくれる気の遣い方は、とっても良いと思ってるんだよ。
頼り甲斐のありそうな太い腕も、不本意ながら気に入ってるんだけど。

その3

朝早くからバーベキューの支度して、車の運転もして、重い荷物も全部持って、しかも今はコンロの前。
「先輩、疲れないの？」
「早番の時は七時出勤だからな、朝早いのは慣れてるんだ。今日は神経使ってないし」
食材は粗方お腹の中におさまり、先輩もビールなんか持ち出してる。
「飲酒運転にならないように、一本だけな。水遊びしてれば、醒めちゃうだろ」
うん、川の冷たい水は気持ち良い。

先輩のハーフパンツから出てる足は、やっぱり筋肉質。
意外に肌理の細かい肌が日焼けして、肩の辺りが赤くなってる。
「それ以上焼けると、服が着られなくなっちゃうよ」
「うん、もうヒリヒリしてる。ちょっと、これ塗ってくれる？」
アロエのジェルを受け取り、肩から背中に伸ばす。
ずいぶん広い背中だなあ。あたしの倍くらいあるかも。
ついでにあたしも日焼け止め追加。

先輩は川にざぶざぶ入って行っちゃって、ちょっと深みになっている場所で泳いでみたりしてる。
気持ち良さそうだな、うずうずする。
「静音も泳いじゃえば？外遊びに来て、日焼け気にしたって仕方ないだろ。色白なんだから、多少は」
「シミになるもん」
「大丈夫だ、シミになったって静音は静音なんだから」
って、横抱えしないで！園児じゃないんだから！
足のつかない場所まで連れて行かれて、先輩の肩に掴まる。

敵は足がついているのか。

川の流れを身体に感じたら、本当に日焼けを気にするのが、バカバカしくなってきた。

子供みたいに遊んでしまって、ビニールシートにごろんと横たわったら、疲れていない筈の先輩が、先に寝息をたて始めた。

こういうの、いいね。

でもね先輩、あたし、さっき気がついたの。

先輩のバーベキューセット、ふたり用なんだね。

あたしの前につきあった子と、やっぱりこういう遊び方をしてたんでしょう？

もちろん、それが良いとか悪いとかじゃなくて、ただそれが、料理を教えたって人と同一人物なのかなーなんて思うだけなんだけど。

隣の気持ち良さそうな寝息に誘われて、あたしも目を閉じたまま、そんなことを考えていた。

その4

翌日曜日、寝坊して起きたら、母がトウモロコシの皮と格闘していた。
「何？このトウモロコシとトマトは」
「今朝、おばあちゃんの顔を見に行ったら、持たされたのよ」
母の実家は近いけれど、我が家より少し奥にあり、叔父夫婦が農業を営んでいる。
「田舎の人は持ってけ持ってけって言うのよね。近所に配るにしても、売れないものだしねえ」
明らかに虫食いのトウモロコシと、熟れすぎたトマトの山、大きくなり過ぎたキュウリ。

エンゲル係数が高いから、料理は必須。
「あたし、喜んでもらってくれる人、知ってるかも」
「じゃ、持ってってあげてちょうだい。傷んじゃってからじゃ、あんまりだから」
前の日に借りたシャツは、洗濯し終えてもう乾いているだろう。
返しついでに、野菜を持っていこう。

メールの返信は、すぐにあった。
熱烈的大歓迎。今日は夕方の買い物以外、何の予定もない。
虫食いのトウモロコシの皮を、母と一緒に剥いで、大鍋で茹でたら汗だくになった。
トマトとキュウリをスーパーの袋に入れ、茹で上がったトウモロコシも入れ、ちょっと考えてから、庭のバジルも入れた。
うん、ニンニクとトウガラシもあったほうがいいな、と冷蔵庫を漁る。
この時点では、何か考えていたわけじゃなくて、ただ使い勝手の良

い組み合わせにしようと思っただけだ。

先輩のアパートの近所は路上駐車できそうもないので、自転車で行く。

１０分そこそこなので、家で着ていたタンクトップの上に、綿のシャツを羽織っただけ。

ボトムスはショートパンツのまま、ＵＶカットの帽子を被って出来上がりの、超お気楽スタイル。

サンダルをひっかけて、夏は自転車もいいなあ、なんて。

先輩の部屋のブザーを押すと、すぐにご機嫌な顔が出てきた。

「おお、ありがとうな。野菜って意識しないと不足気味になるから、助かる」

ビニール袋を渡して帰ろうとすると、寄って行けと言う。

「何か予定でもあるのか？」

「ヒマだから、マシントレーニングでもして来ようかと思ったんだけど」

「ヒマなら、こっちに寄ってけ。俺、日焼けが痛くて、トレーニングに行けないんだ」

その5

「昼メシ、済んだ？」
「寝坊したから、朝昼兼用。先輩はまだだった？」
「食ってけよ、作ってやるから」
料理上手な子に教えてもらって、上達した料理ね。
「いいよ、先輩の手料理食べてばっかりだし」
「俺一人で食べるのが、気がひけるだけだ」

「じゃ、あたしが作る。キッチン貸して」
これはあたしの意思の言葉なんだろうか？
自慢じゃないけど、レパートリーは少ない。
弟と住んでた時なんて、夕食の内容で喧嘩したこともあった。
でも、口から出た言葉は取り消せない。

幸いなことにパスタがあったので、持ち込んだトマトをザクザクと切る。
「何ができるの？」
「冷たいトマトパスタ。その袋のトウモロコシは茹でたばっかりだから、それも食べて」
すっごく手軽なメニュー。
一品以上作ると、ボロが出るかも。
何に対抗しようっていうんだろ、あたし。
女の子らしいことができるって見せてみたいわけ？この熊に。
ニンニクをみじん切りしながら、自分に対して腹が立ってくる。
自分を底上げして価値を高く見せようなんて、卑しい行為だ。

オリーブオイルは無いらしい。
洗濯物を干していたらしい先輩が、「何かしようか？」と声を掛け

てくる。
「大したことしないから、何にもない。お鍋、どこ？」
「吊戸棚の上・・・届かないよな？」
「見ればわかること、いちいち確認しないで」
はいはい、と先輩が鍋を降ろす。
炒めたニンニクとトウガラシに切ったトマト投入で、味付けしたらおしまい。
「ブラックペッパー、ない」
「何それ？普通の胡椒しかないけど」
普通にあると思っていたあたしが、間違っていたろうか。いいや、胡椒で。
出来上がったものを冷蔵庫に入れ、お湯を沸かしはじめる。
その間に、バジルもみじん切り。

「それにしても、メシ作るの決まってたみたいに、自分が持ってきたもので作ってるよな」
「そんなわけ、ないでしょ！帰るつもりだったのにっ！」
「そんなに強い否定の仕方、すんなよ。想像して嬉しくなっちゃっただけなんだから」
嬉しくなっちゃうってことは、先輩はあたしが料理したり洗濯したりすることを、期待してるってことかしらん。
「あたし、女らしくないよ、先輩」
「知ってる」
きっぱり言い切られると、それはそれでムカつく！
パスタを放射状に湯に投入しながら、あたしはぶすったれた顔をしていた。

その6

「冷たいパスタって、家で作れるのか。今度作ってみよう」
気持ち良いくらいのスピードで、先輩のお皿の中身が減っていく。
「美味かった。静音が作ったんだと思うと、感激ひとしお」
あたしの3倍の量を、あたしの半分の時間で食べ終わり、先輩はニコニコしている。
「二度とないかもね」
「え？結婚したら、俺が毎日食事当番？」
パスタが喉にひっかかりそうになった。

先輩のアパートのシンクは小さいので、洗い物は先輩にお任せすることにする。
朝昼兼用の食事をした後に、ここでまた食べちゃって。
やっぱり、マシントレーニングしてカロリー消費しなくちゃ。
「ちょっと休憩したら、帰る。家の残り物みたいなもの貰ってくれて、ありがとう」
「そうか？夜までいればいいのに」
「いたって、別にすることもないし」
「俺はいてくれるだけで、楽しいんだけどな」
真顔ですか！ちょっとそれは、どう反応して良いのか困るセリフなんですけど！

腰に腕が巻きついたと思ったら、胡坐の中にストンと落ちた。
「軽々とあたしを移動しないで！」
「実際に軽いじゃないか」
後ろから回った先輩の腕でがっちりホールドされ、動くことができない。
予定外の先輩の行動にどぎまぎして、胸が早鐘を打つ。

後ろからぎゅうっと抱きしめられて、寄りかかってしまいたいような、逃げ出したいような。

「せめて、これくらいさせろ。今、理性と戦ってんだから」
「戦いに負けないように、放すって手はない？あたし、そろそろお暇しようと」
「ダメ。まだ帰らせない」
耳元で、そういうこと言わないで。
力ずくで向きを変えられ、仰向かされた顔に寄る唇を拒否するつもりはない。
誘い方も態度も強引だけど、この人は絶対、無理強いなんかする人じゃない。

重なった唇の内側に侵入してくる舌は、厚くて熱い。
まずいっ！雰囲気に飲まれそうだ。
あたしはまだそこまで、盛り上がってないんだってば。
片手で背も首もいっぺんに支えられちゃって、もう片方の手が髪から胸に滑り落ちてくる。
大きい手。あたしを手だけで包んじゃいそう。
ドキドキが大きくなって、先輩の肩に乗せていた指に力が入った。

「・・・いてて。昨日、日焼けし過ぎた」
「天罰」
力の入ったあたしの指先で、先輩は覚醒した。
「ちょっと危ないところだったなあ。そのまま、やっちゃうところだった」
「いやいやいや、それは」
先輩の手が首から外されて、あたしの身体は自由になったのに、あたしはまだ胡坐の中だ。

こう思うのは不本意なんだけどね。
ちょっと、残念かも。いや、本当に不本意なんだけどね。
帰り間際に先輩は、あたしの羽織っていたシャツのボタンを上まで留めた。
「胸元が開いてると、上から見えそうになる。誰にも見せんな」
ストレッチ素材のタンクトップは、多分浮かないと思うんだけど、とりあえず言うことを聞いておこうと思う。

その7

「デートがダブルブッキングで、待ち合わせ場所に男を連れてったんだって？」
また、ロッカールームで橋本さんが言う。
「そーんなこと、しません。柏倉のヤツ、そんなこと言ったの？」
「ゴリラみたいな男に威嚇されたって言ってたけど」
ゴリラですって？失礼な。威嚇なんてしないわよ、常識人なんだから。
「つまんねー男！お断りして正解だったわ」
「出た！篠田の切り捨て御免」
そういうこと言われると、頻繁に切り捨ててるみたいじゃない。

「篠田さんが入社したばっかりの頃、男の子たちがしばらく夢見ちゃってたもんねえ。まさか大酒呑みの毒舌だなんて、誰も想像しなかったよねえ」
「なんか、すっごい言われようだね。でも、会社関係で誘われても、トラブったことはないと思うんだけど」
全部3回以内で見極めしてる筈だし、それなりにオトナ同士の話だし。
「柏倉氏、ずいぶんご立腹だったよ。なんで？結構優良物件じゃない？」
「家持で高学歴で？でも、バカじゃない。そうやって、プライベートをダダ漏れにするヤツなんて、いらない。優良物件なら、橋本さんが拾えば？」
「私、再来月結婚するんだけど」
橋本さんにまでそんなことを言ってるんじゃ、入社研修が一緒だった子会社の同期たちも、きっと知ってるんだろうなあ。
頭、痛い。もう、会社関係の男の誘いには、乗らないことにしよう。

狭まる選択範囲。

「で、そのゴリラみたいな男っていうのは、なんなの？」

「高校の先輩。たまたま駅で会っただけ」

嘘じゃないもん。今現在、ちょっと微妙な感じではあるけどね。

「あ、それって原口先生？ゴリラっていうより、もっと動のイメージだよね」

パートさんが入ってきて、話を逸らしてくれたので、解放される。

柏倉のヤツ、覚えとけ。

次のシステム開発で子会社の意見を求められたら、不具合の部分だけを大書きして送りつけてやる。

あたしの勤め先は試薬（簡単なところでは硫酸とかアンモニアとかね）の卸売だから、危険物は身近にあるんだけど、まさか柏倉が危険物だなんて、気がつかなかった。

って話を、スポーツクラブのラウンジで先輩にごちゃごちゃと愚痴った。

社内でこれ以上の恥を晒すのはごめんだし、週末に会う予定の友達とは、共通の友達の出産祝いを買う予定で、そんな時にこんな愚痴をこぼすのもおかしいし、でも誰かにぶちまけたい。

「だから、その前にとっとと俺に返事すれば」

「あんな突拍子もない話より、そっちのほうがリアルでしょ？」

「突拍子がないと思ってるのは、静音だけだ。俺はあの日、ジムでトレーニングしてる時に、おまえを紹介してくれって話しかけられたんだ」

「え？ここの会員に？」

「俺と話してる小柄な子を紹介しろって。俺自身が名前も知らないヤツだぞ。あれは俺の女だって断っといた」

はい？ここでも、そんな話になってたんですか？

・・・あたし、居場所ないじゃない。

それでも先輩に腹を立てないのは、あたしが先輩に好意を抱いているからだ。
そう気がついたのは、柏倉に対する怒りが冷めてからだった。

その8

お盆に帰省（って程じゃない。1時間程度で帰ってくる）した弟と、量販店で買い出しをしていたら、先輩に声をかけられた。
「静音も休みか？保育園も交代で休みだ」
身体の大きい人に反射的に敵対心を持つ龍太郎は、すでに警戒心丸出しの顔だ。
「静音の弟さん？はじめまして」
龍太郎の表情をモノともせず、先輩はいつも通りに腰を屈めた。
「結婚相手の原口です」
「は？えーっと、静音、結婚すんの？」
不意打ちを喰らった弟の視線が、あたしの顔と先輩の顔を往復する。
「ぜんっぜん決まってないから！家族にまでそれを言うか！」
「いや、決まってるから。一念天に通ずってね」

呆気にとられた龍太郎の横で、ニヤニヤする熊。
ちなみに、二人の身長差は約30センチだ。
「つまり、原口さんはうちの姉貴に結婚の申し込みをして、姉貴はそれを承諾してないってことですか」
自分で意味を飲み込むために、龍太郎が整理する。
「そう。決断に時間かけちゃってて」
「ちがーうっ！この熊は、つきあい始める前に、そう言い出したのっ！」
もう、どこ向いて喋ってんだか、あたし。

「静音は見た目通りじゃないですよ。こんな女、どこがいいんです？気は強いわ喧しいわ、おまけに口も悪い」
「まあ、自分の姉貴をそう言わないで。その気が強くて喧しいところが、気に入ってるんだ」

「それ、ちっとも褒め言葉じゃないっ！」
セリフが三つ巴になって、他人様の迷惑になると困るので、レジを済ませて駐車場の隅の自販機の前に移動した。
そして、ちょっと感心する。
警戒心丸出しだった龍太郎が、短時間で警戒を解いて、笑顔まで見せたりしてる。
これは、ちょっと真似できない。

またね、と手を振って車を出してから、ハンドルを握った龍太郎は前を向いたまま、言った。
「いいんじゃない？あの人。静音がぎゃーぎゃー騒いでも、泰然としてそうだし。ただ、ガテン系の人と静音ってのは意外だけど」
「えーと、肉体労働者に近いかも知れないけど、ガテン系じゃなくて福祉系なの」
「違うの？何やってる人？」
「・・・事故ると困るから、赤信号になったら言う」
赤信号で話を聞いた龍太郎はハンドルの上に顔を伏せ、信号が変わっても顔が上げられずに、後ろからクラクションを鳴らされた。
「いいじゃん。俺、あの人、気に入った」
まあね。あたしだって、気には入ってるのよ。ちょっと押され気味だけどね。

その８（後書き）

ええっと。何故弟が身体の大きな人に敵対心を抱くのか、理由のわからない方は、「しあわせになりたい」というお話の、一番最初のページをご確認くださいませ。

その1

お祭が翌週末になり、踊りをもう一度復習するために、先輩と夜の公園で待ち合わせる。
何か鞄を持ってるなーと思ったら、中から朱赤のTシャツが出てきた。
「何？これ」
「とりあえず、広げて」
言われた通りに広げると、胸に何匹かの動物が鳴子を持って踊っている。
そして背中には、ローマ字で保育園の名前が白抜き。
「これで踊るの？可愛い。サンプル？」
「静音の」
「あたしの？」
「うん、静音が着るの」

確かに、サイズはXSだ。
踊りを教えたお礼にくれるってことだろうかと一瞬考えたんだけど、パジャマくらいにしかならない。
だって、背中に保育園の名前が入ってるんだから。
「トップで踊って」
「はい？」
「だから来週の土曜日に、園児の前で踊って」
「なんですってぇ？」
何かの聞き間違いだろうか。あたし、保育園に通う子供はいないんだけど。

「トップで踊ってくれる予定だった人の子供がケガして、踊れなくなったんだよ。他の人は全員イヤだって言うし」

「先輩が先頭に立てばいいじゃない！」
「俺、踊らなくなったの。ふらふ（大旗）を振ることになった。先週、園長がでかいの縫ったんだ」
「あたし、父兄じゃないわよ！」
「踊りの先生が先頭に立ってくれるって言ったら、参加者がみんな喜んでるし」
もう、そう言っちゃったんですね？あたし、先生じゃないんですけど。
「あたしが踊らないって言ったら？」
「静音は踊ってくれる」
「やだもーん」

膝立ちになった先輩が、あたしの両肩に手を乗せた。
「頼むわ。本当のとこ、困ってんだ」
意外なほど真剣な表情。
「ひとりが先頭に立つんじゃなくて、何列かにするんならトップはいらないよ？」
「きっちり踊れる人が少ないんだよ。前の方は5・6歳児が並ぶから、目の前に手本が欲しい」
んん・・・よくわからない。
あたしがいたチームは、祭の三ヶ月前から、週に何回も練習してたから、当日に振り付けのわからないひとなんて、いなかったし。
「付添いのお母さんは、年少児の親ばっかりなんだ。そうすると、自分の子供に気を取られて、進むペースは決められない」
「それでも、やだって言ったら？」
「強制はできないよな。でも、助けてくれ」
真面目な顔だ。いつもの飄々とした喋り方じゃない。

「あたしが助けには、ならないかもよ？もう何年も人前でなんて踊ってないし」

「遊びの延長でいい。子供と付き添いの大人が、不安にならなければ」
置かれた手に、力が入ってる。
ふう、と溜息を吐く。心当たりがあるのだと言ってしまった彼は、あたしが意地で拒否すれば、他の大勢の前で頭を下げて、ふらふを振らずに自分でトップに立つのだろう。
「ふらふ、他に振る人はいないの？」
「予算がないから、旗竿が切り出した竹なんだ。みんな持つだけで精一杯だった」
ふう、ともう一度、溜息を吐く。しょうがないなあ。

「いいよ、踊る」
「踊ってくれるか！」
肩に乗せられた手が首に巻きついて、きゅうっと引き寄せられた。
「静音なら、引き受けてくれると思ってた。ごめんな、勝手に決めて」
引き寄せられた先は、先輩の腕の中。
膝立ちの姿勢のままだから、先輩の肩の上に、あたしの顎が乗る。
喜んでいる目尻の皺が妙に可愛らしく見えて、そこに唇をつけてしまう。
慌てた先輩があたしに顔を向け、次に出会ったのは唇だ。
先輩の腕が首から背中を通って腰に巻きつく。
ちょっとずつ深くなっていくキスに、あたしも先輩の背に手をまわした。
あ、やば。膝から崩れそう。
もっと、この人のことを知ってもいい。
唇と腕だけじゃなくて、ニヤニヤ笑いと人を喰った喋りじゃなくて、もっと。

その2

お祭りへの参加は土曜日だけ、保育園チームだから、長いコースを踊ることはない。
衣装はTシャツと短いスパッツだけだから、化粧や髪に時間を掛けることもないし、コンテストにもエントリーしてないから、気楽と言えば気楽だ。
土曜日の昼過ぎに、ポニーテールを逆毛にして鳴子入りのウエストバッグをつけたあたしを見て、母は「お祭り？」と聞いた。
「うん、ちょっと助っ人を頼まれたから、一日保育士」
「どうせなら、笑夢（えむ）で踊ればいいのに」
「踊りたい気はあるんだけどさ、練習にフルで出られないし」
練習のために週に何度も拘束されるのは、社会人にはちょっと辛い。

どんよりしたお天気で、降らないといいなんて思いながら歩く。
集合場所で先輩が持っていたふらふは、綺麗な空色だ。
ところどころに白い布が見えるのは、雲なのかな。
多分、中央には保育園の名前が入っているんだと思う。
「いいだろ。旗が空で、子供たちが太陽だって園長が考えたんだ」
ああそうか、それで朱赤のシャツなのか。今日は、お日様がいっぱいだね。
本当に、お天気がもつといいなあ。

「あきふみせんせー！」
子供たちが何人も走って来る。
よじ登ろうとする子、体当たりをする子、旗を持ってみたいと言う子。
「あきふみせんせい、人気だね」
ぼちぼち集まって来はじめた他の保育士さんたちと、挨拶を交わす。

園長先生に丁寧に挨拶されて、恐縮してしまった。
「原口先生のお友達ですって？良い踊り子さんなんですってねえ」
「そんなことはないです。踊るのが久しぶりなので、今日は楽しませていただきます」

「はーい、みんな集まってー。今日は、このお姉さんが一番前で上手に踊ってくれるので、みんなも負けないくらいかっこ良く踊りましょう」
園長先生がメガホンで子供たちに話すのを、保育士さんたちと並んで聞く。
ちょっとくすぐったい。
子供たちの後ろに、竹竿を立てて仁王立ちの熊。
視線が油断なく子供たちの頭の上を、行き来している。
今日は「原口先輩」じゃなくて「あきふみせんせい」なんだな。
一人だけ朱赤じゃなくて、青いシャツ。サイズがなかったんだろうなあ。
あきふみせんせい、お仕事を拝見させていただきます。

カオスな子供たちを並ばせ、小さい子供の横にはお母さんたち。
虹色のオーガンジーのリボンを襷掛けにして、背中に大きく蝶々結び。
進行係さんに先導されて、道路に出るとワクワクする。
さあ、子供たち、踊るよ！
あたしの後ろには保育士さんが二人、つまり三角形のトップ。
最後尾の先輩が、ふらふを大きく振って準備完了の合図をする。
空はどんより曇っているのに、先輩の上にだけ青空が広がる。

「子供たち、元気はいいか！」
「おー！」
「二歳児から六歳児までが、可愛く元気に踊ります。沿道の皆々様

には手拍子の応援をお願いします。では、まいります！いよぉーっ！よっちょれっ！」
声だし役の若いお父さんのアオリで、音楽が始まる。
子供の歩幅に気をつけながら、あたしは踊り進めた。

その3

「よさこい鳴子踊り」一曲、約5分。
先頭で後ろを引っ張って踊る高揚感。
沿道に大きく頭を下げて、後ろを振り返ると、子供たちも楽しそうな顔をしてる。
次の演舞会場はすぐそこ、２０分後スタートに合わせて、移動し始める。
踊る前に給水地点がある筈だ。
保育士さんやお母さんたちと一緒に子供を誘導する。
小さい子供たちは、抱っこされたがったり勝手なほうに歩いて行っちゃったりで、目が離せない。

「みんな、あきふみ先生の後について来るんだぞぉ！」
一際大きい先輩が持つ、空色のふらふを目印に動く。
子供たちには何が何でも給水させなくてはならず、忙しい。
給水地点は、ますますカオスだった。
塩分補給のクエン酸のタブレットをいくつも欲しがる、自分でジャグから水を汲みたがる、テーブルの前を離れないで水を飲む、誰かが飲んでいた水がかかったと泣く、鳴子を落としたと足元を走り回る。
保育士さんが大わらわで子供たちに給水させているのを、及ばずながら手伝っているうちに、自分は給水に失敗した。
大丈夫、この距離なら二曲分しかない。
待機場所に移動するようにと声がかかり、子供を並ばせた後に後ろを振り返った。

空はやはり薄曇りで、雨にならないことを感謝するしかない。
一番後ろで仁王立ちしている大きな人は、自分の持つ竿につけられ

た、空色のふらふを見上げてる。
少しだけ吹いている風に、薄い生地がゆらゆらと揺れる。
先輩の上にだけ、青空。
そうだね。先輩には、曇天よりも青い空が似合う。
さて、踊ろう。
姿勢を正して、演舞会場に進む。
声だし役が、マイクのテストがてら、子供たちに声をかける。
「子供たち、かっこいいぞぉ！頑張って踊ろうなっ！」
「おー！」
沿道に挨拶をして、また曲が始まる。
二曲しかない。楽しく踊ろう。よっちょれ！

ペースを確認するために、ちらりと肩越しに振り返る。
大丈夫、子供たちは笑って踊ってる。
後ろでふらふが大きくはためく。
曇天の下に、先輩の作る青い空。
ああ、気持ち良い。鳴子の音が自分の手元でパチンとはじける。手足が自由に動く。
沿道の皆様、拍手とご声援をありがとう。

一曲踊り終わって、間髪入れずに二曲目に入る。
「喉かわいたー」なんて脱落する子供を、隊列の後ろについてる保護者や保育士が拾って行く。

じんばも　ばんばも　よう踊る
鳴子両手に　よう踊る　よう踊る

ハイになった頭は、自分の身体の異変を否定して、踊り続けたがった。
異常な発汗と共に曲が終わり、沿道に頭を下げた途端に、あたしの

膝には力が入らなくなった。
あたしの周り、空気が薄い。
肩を貸してもらって、よろけながら沿道に出て、座り込んだら立てない。
脇の下に保冷剤を入れられ、スポーツドリンクを差し出される。
あたしはいいから、子供たちを見てやってください。
言いたくても呼吸が整わなくて、倒れこみたいのを堪えているうちに、太い腕があたしを掬った。
「とりあえず、日陰に運びます。すぐ戻りますから」

その4

「すみません、解散したらすぐに戻りますから、お願いします」
多分、誰かがついてきてくれたんだろう。街路樹の日陰に降ろされると、走って行く足音が聞こえた。
冷たいタオルが首にあてられ、背中に涼感スプレーを拭きつけられる。
脇に保冷剤を挟んだまま、全部飲むように言われたスポーツドリンクをゆっくりと飲み終えた頃、やっと呼吸が整う。
「もう大丈夫ですか？」
顔を覗き込まれて頷くと、若いお母さんの横に、小さな女の子が見えた。
彼女が首を冷やしてくれていたらしい。小さい手にタオルを持っている。
「ありがとう。ごめんね」
はにかむように後ろに隠れるのが、可愛らしい。

「あきふみせんせい、おこってたね」
「あれは、心配してたのよ」
親子の長閑な会話を聞きながら、反省する。
保育のプロが複数で居たんだから、あたしが手を出す必要はなかったのに。
先輩と園長先生が戻ってきて、付き添っていてくれたお母さんに頭を下げた。
申し訳なくて小さくなる。

「ごめんなさいね、園の関係者でもないのに、こんな危険に晒しちゃって」
園長先生があたしの横に膝を着いて、丁寧に頭を下げたので、ます

ます申し訳なくなった。
「こちらこそ、すみません。子供たちの給水に気をとられて、自分が給水してなかったんです」
あたしも園長先生に頭を下げたその時、おっそろしく不機嫌な声が上から降ってきた。
「自分の身も守れないヤツが、他人の世話を焼くなっ」
おそるおそる上を見上げると、はるか上に腕を組んだ形の熊。

「原口先生、篠田さんはこちらからお願いして参加していただいたんだし、子供たちにも不慣れだし」
咄嗟にあたしを庇ってくれた園長先生に頭を下げながら、熊は撤回するどころか、言葉を続けた。
「子供を扱うプロと、子育て中の母親たちが何人もいたんだ。だからそれを信頼してれば良かったのに、静音はそうしないで、自分の体調管理を怠ったんだろ」
悔しいけど、その通りだ。言い返せない。
膝を抱えたまま俯くと、園長先生が肩に手を掛けてくれた。
「原口先生。心配したのはわかるけど、言い過ぎですよ。篠田さんは好意で協力してくれたんですからね」
踊って高揚していた気分が消えて、涙が出そうになった。

ゆっくり立ち上がると、まだ少しふらついた。
先輩が肩にがっしりと手を回して、支えてくれてる。
「今日は有志参加で、公務じゃないの。ご協力、本当にありがとう。今度お礼に、私のポケットマネーでご馳走するわ。保育園に来て頂戴」
あたしの顔色が戻りつつあるのを確認して、園長先生はその場を離れていった。
私の肩に手を回したまま、先輩がちょっとずつ動き始める。

まだ、黙ってる。ねえ、怒ってる？あたしが迷惑掛けたから。
足が、ふわふわする。寄りかからないと、歩けない。
先輩の顔をちらちら見上げながら、誘導されるままに歩いた。

その5

不機嫌な顔を見ながら、手近な喫茶店で向かい合わせに座る。
あ、あたし、まだ背中に大きくリボン結びだ。
慌てて外して、向かい側の表情を伺いながら畳む。
「怒って・・・る？」
「怒ってねえよ」
ほら、怒ってるじゃない。

おまえの鳴子、と鳴子を差し出されて、バッグにしまう。
お店の人がオーダーを聞きに来たので、アイスコーヒーを頼もうとすると、レモネードに変更された。
「あと、できれば水を、ピッチャーで置いていってください。その分払いますから」
「いえ、結構ですよ。踊り子さんは水分補給しないと」
先輩は頭を下げた後に、やっとあたしの顔を見た。
「飲め。そして、冷やせ」

エアコンの効いた店内で、身体が回復してくると、やっとあたしも頭が働く。
子供たちを驚かせちゃった。
助っ人じゃなくて、迷惑を掛けちゃった。
こんな天気の日は、熱中症になりやすいと知っていたのに。
「・・・ごめんなさい」
「謝るのは、こっちだ。自分はちゃんと給水したのに、おまえにまで気が回らなかった。踊り慣れてるんだから、当然できるだろうと思ってた」
そうなのだ。踊り子が自分の脱水を気にかけるのは、鉄板の約束事で、できない方が間違ってる。

保育士さんは、あの混沌の中で、自分のことをちゃんとできてるのか。
「大人が倒れたら、子供たちの世話ができなくなるだろ？だから一番に、自分の手当てをする習慣がついてんだ。おまえは素人だから、そんなことできないっての忘れてた」
申し訳なくて、もう一度頭を下げる。
「ごめんね」
先輩の顔が柔らかくなる。この人はいつも、すごく良いタイミングで、こんな顔をする。
「腹を立てたのは、自分に対してだ。静音は悪くない。軽くて良かった」
お水ばっかり何杯も飲み、先輩がポケットから出した塩分補給のタブレットを齧ったら、眠くなってきた。
「慌てて、強く言い過ぎた。悪かった」
先輩の声が、少し遠い。

「だるくて、眠い」
「ああ、もうちょっと休憩したら、送ってってやる。歩いて来たのか？」
「自転車」
「じゃ、2ケツだな」
道路交通法違反です、あきふみせんせい。
5分くらいウトウトしたみたいで、気がついたら先輩はレジを済ませていた。
「回復するまで、フォローできなかった侘びもしないとな」
ううん、それは違う。
公務じゃなくても、先輩は園児たちの先生なのだ。
先生が子供たちを放って自分の気になることを優先したら、あたしは先輩に失望していた。

その6

二日間のお祭だけど、二日目にエントリーはない。
卒園児たちがあちこちのチームで踊るから、なんて言う先輩と待ち合わせ。
肩ストラップのワンピースと、夏のお約束の日傘。
踊りが流して行くのを見ながら、少し飲んじゃうつもりだから、自転車はやめておく。
昨日の晩の先輩、自転車漕ぎ難そうだったな。
２６インチのママチャリのサドルを目一杯上げて、ゆらゆら。

今日は昨日踊った場所とは別の会場に行く。
長いコースを繰り返しで踊るコンテスト参加チームたちは、粋で華やかだ。
あたしが以前参加していたチームも、衣装や振り付けに趣向を凝らし、曲もプロに作ってもらっていた。
昨日は最後さえちゃんとしてれば、楽しかったな。
来年、踊っちゃおうかな。笑夢の美少女、復活・・・少女じゃないか。

先輩との待ち合わせは、目印はいらない。
大体の場所さえ決めておけば、雑踏の中に飛び出る頭。
「今日はずいぶん、可愛い格好してるな」
「いつも、何着ても可愛いでしょうが」
先輩と会うときはジャージかジーンズが基本だから、女の子服を見たのは、池袋で鉢合わせした時だけだったかも。

「体調は大丈夫か」
「うん、なんでもない。今日はビール飲みながら、ゆっくり見物だ

し」
「利尿作用で脱水が怖いから、アルコールは止めとけ」
過保護じゃないですか、あきふみせんせい？
賑やかな会場を歩きながら、時々小学校低学年の子供に声援を送る。
声をかけられた子供は嬉しそうにこちらを見るけど、踊りながら前に進んで行く。
お祭だとは言っても、長いコースを踊るので、知った顔に会うことは少ない。

「手足が痺れたりしないか？」
「大丈夫だってば、そこまで体力は低くない」
反発しながら、ちょっと嬉しい。
そんな風に、心配してくれてたんだね。
人混みで邪魔な日傘を畳んで、並んで踊りを見ていた。

その7

「原口先生」
後ろから声をかけられて振り向くと、小学校の低学年の男の子と、若いお母さんだった。
「お久しぶりです」
幾分硬くなった先輩は、すぐに子供のほうにしゃがみこんだ。
「ずいぶん大きくなったなあ。元気だったか」
子供は恥ずかしそうに、先輩と話している。
母親の視線は、あたしに向いていた。

「原口先生は、デートですか」
「そうです」
立ち上がった先輩が、あたしの肩を抱く。
なんか、すごく微妙な空気だ。
先輩の顔を見上げ、母親の顔を見てから、子供に目を落とした。
「幸せそうで、良かったわ。私もね、結婚しました」
先輩の指の力が、少し緩くなった。
「おめでとうございます。お幸せに」

去っていく母子の後姿を見て、先輩がこっそり吐いた溜息で、事情がわかったような気がした。
流し踊りが賑やかに進む通りを見ながら、先輩は小さく「わかっちゃったよな、ごめんな」と言った。
「なりたての母子家庭と新米の保育士なんて、ベタな組み合わせだろ。もう二度と会わないと思ってたんだけどな。市内なら、そんなわけないか」
「いいよ、別に気にしないから」
嘘。すっごく気になる。

「自分が寝た後に母親が出掛けたことに気がついた子供が、夜の１１時にパジャマのまま警察に保護された。一度眠ったら起きない子だから、なんて言葉を鵜呑みにした自分のバカさ加減に嫌気がさした。」

「聞きたくない」

「俺があれもこれも、甘く見てた証拠だ。寄りかかってきている人の抱えているモノを、引き受ける覚悟はできてなかった」

「聞きたくないってば」

過去の恋愛なんて、気にするだけ間違ってる。

だって先輩は今、あたしの横にいるんだから。

だけど、この先は？この先、あたしがどうなるんだか、知りたい。

曇天の下に広がる、空色のふらふ。

先輩の作る青空を、振り返って確認したあたし。

覚悟を決めよう。

あたしはもう、先輩の手の内だ。

その1

夕方遅くになってくると、小腹がすく。
ちょこちょことジャンクな食べ物をつまみながら、熱の冷めない通りを歩いた。
「今日はどこも混雑してるしなあ。メシ、どうする？」
「何かテイクアウトしようか。涼しくなってきたから、アルコール解禁」
「テイクアウトして、公園か？」
こういうとこ、鈍い。

「先輩のアパート。暑いのに、なんで公園よ？」
「いや、いいけどさあ」
珍しく言い澱んだ先輩は、あたしの肩に目を遣った。
「そんな裸の肩出して、男のアパートに来るのか？」
裸の肩！直截すぎて、色気もヘチマもないセリフだ。
「気になる？」
「密室だと思うとね」

「あたしはそれでも、いいんだけど」
ああ、言っちゃった。
さっき以前の恋人に会ってしまってから、先輩のテンションは微妙に落ちていて、あたしはそれが気になって仕方がない。
別に対抗してるわけじゃなくて、なんかこう、そんなことがあっても、あたしは大丈夫だよって言いたいだけ。
「それでもいいって言ったな？」
「言ったよ」
「すぐ、帰るぞ」
「お祭り、まだ終わってないよ」

「終わるまでなんて、待ってられるか」
「卒園児の演舞は？」
「来年見る」
「来年踊ってるかどうかなんて、わかんないじゃない。衣装も振り付けも違うんだよ？」
「約束してるわけじゃない。こっちのほうが火急だ」

駅前でカツサンドとビールを何本か買うと、先輩は賑わっている通りと別の方向へ歩き出した。
うわあ、いいって言っちゃったよ、あたし。
今日もいっぱい汗掻いてるのに。
いつもよりも少し早足の先輩の後ろを歩き、自分に確認する。
この人と、続けていく気はある？
うん、ある。大丈夫。多分、後悔したりはしない。
このペースだと、シャワーとか言い出せない気がしないでも、ないけど。

その2

アパートに着くと先輩はいきなり、居間兼食堂と寝室の境目の引き戸を開けた。
ベッドマットを直接床に置いたみたいな低い寝床と、マンガ本でぎゅうぎゅうの本棚と、コルクボードに無造作に張られたスナップ写真。
保育園の写真だあ。確かに子供たちが、何人もぶら下がってる。
・・・なんてものを、じっくり眺める余裕は、与えてもらえなかった。
掠れた声で呼ばれたと思った次の瞬間、あたしはベッドの上で先輩の膝に抱え込まれていた。

「シャワーは？」
「後で」
「お腹、すかない？」
「後で」
唇をふさがれて、肩のストラップが外される。
「そんな、高校生みたいに焦らなくても」
「高校生も大人も、こんな時には似たようなもんだ」
反論する間もなく、唇が降ってくる。
汗もシャワーも空腹も、後回し。

☆

潰しそうで怖いと言いながら、先輩の手があたしの髪を梳く。
先輩の脇の下に頭を乗せて、漂流した海から生還したあたしは、妙に満ち足りた気分だ。
大きな手はとても優しかったし、先輩が満足した顔をしているのが

嬉しい。
芯熱の高そうな身体は本当に熱くて、硬い筋肉が頼もしい。
性急な行為だったけれども、強引じゃなかった。

「・・・腹、減ったな」
「その前に、シャワー貸して。どうしようもなく汗だらけ」
放り投げられたワンピースを拾い、狭いバスルームで一人になった時、自分が幸福だと高揚していることに気がついた。
もう、逃げられない。逃げる気はない。
あたしはこれから先輩と向き合いながら、自分の行く場所を探すのだ。

車で送ってもらうために、買ってきたビールは飲めなかった。
そして今晩、「原口先輩」は「昭文」になった。

その2（後書き）

☆部分の詳細は、ムーンライトに。

その3

スポーツクラブのロビーを一緒に抜け、あたしの車の助手席に座る熊は、なんとも狭そうだ。
アパートの近所で、路上駐車のできる場所はない。
だから本当に、送って帰るだけ。
時々、部屋に寄りたいなと思う。
話し足りなかったり、昭文が上機嫌だったりする時。
だけどお互い仕事も持っているし、別々の生活をしているんだし、それくらいの感情のコントロールはできる程度にオトナだもの。

公園に寄って、缶ジュース一本だけの時間、寄りかかっていることくらいはある。
昭文の大きい背中に背中合わせに座って、まだ秋になる前の、だけど夏じゃない空気を吸い込んだりする。
何も言わないけど、こんな時間は好き。
昭文はあたしを急がせたりしない。
「結婚はすることに決まっている」と言い切るけど、それがいつという期限はなくて、ただあたしがそう決意するのを待っている感じ。
あたしの口の悪さとか、反射的に反論する癖だとかを面白がって、ニヤニヤしながらあたしの顔を覗き込む。
面倒じゃないのかな、あたしなら反論に反論で対抗して、気まずくなるところだ。

「だから、簡単に持ち上げるなっ！」
「説明するより、見せたほうが早い」
木の幹に、涼しくなり始めたっていうのに羽化した蝉がとまっていた。
薄緑に透ける透明な羽を伸ばして、しんとした美しさ。

「うわ、本当に綺麗・・・」
「静音はさ、こういうものをキモチワルイとか苦手とかって言わないな。ヘビは平気か？」
「爬虫類は、やだ。せめて両生類にして」
笑いながら、地面にストンと降ろされる。
あたしを持ち上げるために、ベンチプレスしているわけじゃないでしょうに。

「今度の休みはどうする？」
「蔵の町めぐり。今度こそ、あたしがお弁当作る」
「ふうん？おにぎりとウインナーだけでも、文句は言わないぞ、俺は」
ううっ！悔しい！
実は一度、お弁当を作ると言って、寝坊した実績があるのだ。
今度こそ、あたしだってやればできると言わせてやる。
図書館で、お弁当の本を借りたのは、もちろん機密事項。

その４

携帯で翌日の天気を確認しながら、買い物籠の中身を見て悩む。
雨５０％って、微妙なところだよなあ。
台風さん、進路を変えないでくださいませね。
だって明日は、お弁当作るって宣言しちゃったんだもん。
熊の部屋でそれを開けるより、外で見せたほうがボロが出ない・・・
気がする。
鶏肉ＯＫアスパラＯＫベーコンＯＫ、シメジＯＫししとうＯＫプチトマトＯＫ！！！

夕食が済んでからおもむろにキッチンに立ち、ヤングコーンに豚バラスライスを巻き始めたあたしを見て、母が驚く。
「明日、何かあるの？」
「出かけるのに、お弁当作るのよ」
「静音がお弁当？間違いなく台風の進路がこっちに向くわ」
どういう意味よ。
「いいところを見せたい相手なの？どんな人？」
「そういうわけじゃないのっ！しかるべき時には紹介するから、気にしないで！」
意味ありげに母が笑う。
あたしよりマメで料理のできる男に対抗してるんだとは、言いたくない。
しかも、あんな厚い掌で、太い指で！

で、母の不気味な予言どおり、台風はこちらに進路を決めたらしい。
何が悲しくて、日曜日の朝７時にどんより曇った空を見上げなくてはならないのだ。
お弁当を作るために起きたのよ、あたしは！

空に喧嘩売っても、仕方がないんだけど。
下拵えしてしまったものを、そのままにしておくわけにもいかない。
朝からせっせと鶏の照り焼きを焼き、野菜を茹で、おにぎりを握る。

お弁当っていうのは、外で食べれば2割増で美味しいのだ。
雨でも遊べる場所はないのかとか思いながら、容器を総動員して詰めていると、母が「何人前？」と訊く。
「2人分だよ」
「・・・カバとでも、一緒に出かけるの？」
熊だってば。
あたしより更に小さい母は、自分を基準にモノを考えるから、バケモノのような大男を連想したかも。
今から車で家を出ると連絡が来て外に出ようとするあたしに、くっついて出て来そうになったので、振り切るのに骨が折れた。
だから、しかるべき時には紹介しますからっ！

その5

「川越についた頃、雨が降りそうだよなあ」
「せっかくお弁当作ったのに」
「お、今日は起きたのか。雨の中のドライブでもしようか？」
ぶすったれて前を向く。
いいもん。雨は嫌いじゃないから、ドライブがてら車の中でお弁当。
自分の知らない業界の話っていうのは案外と面白くて、保育園のトピックスを熱心に聞いてしまう。
「お祭の時のお姉さんみたいに、よさこいの先生になるんだって言ってる子がいるぞ」
「お姉さんって、あたし？」
「お姉さん、可愛くて上手でって、女の子に人気だよ。遊びに来れば？」
うわ、なんか照れくさい。
子供たちを驚かせて、他の人にも迷惑を掛けて、あたしにとってあのお祭は、反省だらけだったのに。
「運動会、見に行く」

程なく雨が降り始め、ラジオから流れる台風の進路を聞く。
うん、今日は一日中雨。
遠くに行くつもりもなく、近場を車でウロウロして、都会でないことに感謝する。
わざわざ出掛けて行かなくても、街を外れれば美しい自然と長閑な田園風景が、手近なのだ。
雨の中で一際冴えた緑が、風を受け始めてる。
ちょっと早いけど、風が強くなっちゃうと困るので、目についた東

屋のある公園に入り、屋根の下で荷物を広げた。
「おお、力作」
「力作じゃないっ！これくらいはできるっ！」
内容については、お弁当の本を参考にしたけどね。
自宅暮らしで、家では母が夕食作ってるんだもん。
日常的に包丁を持っている人ほど慣れていないし、「やってもらう」が当たり前になってると、自分ではしない。

雨の中の東屋は、まわりがあまりにも静かで、ここだけが別世界のようだ。
雨の吹き込まない場所を選んで、お弁当を広げる。
食べながら、強くなってきた雨の音を聞く。
静かで、贅沢。

「うわ、風が本格的になってきた。そろそろ片付けるぞ」
空いた容器を袋に入れているうちに、どんどん雨が強くなる。
「せっかく弁当作ってくれたのに、ゆっくりできなかったな」
「お粗末さまでした。またの機会をお楽しみに」
ひどくなる雨の中、傘を傾けて車に戻ると、膝から下はびしょびしょだ。
駐車場にぽつんと一台だけおいてある車は、雨の中を漂流する小さなカプセル。
エンジンをかけずに、しばらく肩をつけたまま、ふたりで雨の音を聞いていた。

その6

「あ、もう１０時だから、帰る」
「たまには、泊まってけよ」
「明日また、会うじゃない」
土曜の晩だから、泊まっていこうと思えば無理じゃない。
だけど、昭文のアパートで、眠ったことはない。
実は、横に人がいると、眠れない。

今まで付き合った男たちと泊まった時も、細切れの眠りが辛かった。
学生時代の旅行もそうだったし、時々友人と行く旅行でも、眠りが浅くてとても消耗する。
神経質な性質ではない筈だけど、浅い眠りの後の浮腫んだ顔っていうのは、あんまり見せたいものじゃない。
気軽に行き来できるので、昭文のアパートにあたしの荷物が増えることもない。
誰が撮ってくれたのか、お祭の時のあたしの写真が一枚、コルクボードに張ってある。

あたしの仕事は流通事務で、注文を受けたものを仕入れて、配達するための手続きをするってだけなんだけど、時々すっごい我儘なお客さんがいて、毒劇物にも拘わらず、発注時間を過ぎてから電話してきて翌日に持って来いとか言う。
そういう人って大抵大きな研究所だったりするので、とっても偉そうだ。
メーカーさんに無理言って、当日便に乗せてもらって、営業が直接届けたりして。
そんな薬品を間違って発注したりすると、後が大変。
で、ここ2回、あたしは立て続けにそれをやった。

イイワケは山ほどあるし、実は向こうの言い間違いで、電話を受けた時のメモも残ってるんだけど、ＦＡＸじゃないので、あたしの書き間違いだと言われれば、言い返せない。
なんせ大きな研究所のエラソウな人なので、聞き方が悪いとか平気で言うし。
営業さんにも流通の責任者にも苦情が来て、返品のできない品物だから重要管理物品の在庫が増えて、商品管理からも大文句を言われて、すっかりへこんだ。
諸先輩方は、あんまり庇ってくれたりしないから（当たり前だ、本人たちもそれを乗り越えているんだから）自分で自分を立て直すしかない。

スポーツクラブでボクササイズのレッスンを受けても気分はすっきりせず、ついでにマシントレーニングもしてやろうとジムに入ると、腹筋に勤しむ熊。
「どうした？迎えに来たのか？」
「あたしも、サーキット一周する」
不審な顔をしている熊の横を通り抜け、ウエイトの調整をする。
あたしがマシン2台目に移ったところで、昭文はサーキットを終えたらしい。
ランニングマシンで足を動かしながら、こっちを見てる。
やりにくいったら。

一周したら、お風呂に入るのに慌てる時間になった。
「あたし、これからお風呂だから、先に帰っていいよ」
そう言ったのに、待っていると言う。
「待ってたって、あたし、今日は不機嫌だよ」
「わかってるから、待ってるって言ってんだ」
ああもう、他人の顔を見るのが習慣になってるヤツって、本当にや

りにくい！

その7

「ちょっと寄ってけ」
「車、置くとこないもん」
「じゃ、どこか停められるところでいいや」
近所の児童公園の横に車を着け、昭文の顔を見る。
へこんだ時って、他人と合わせる余裕がなくて、あんまり誰とも喋りたくない。
「不機嫌だよ、当り散らすかもよ」

「不機嫌じゃなくて、落ち込んでんだろ。仕事か？」
うっと言葉に詰まる。
そうなの。当り散らす元気なんて、本当はないの。
への字に結んじゃった口が、認めてるみたいで腹が立つ。
「怒ってる顔と落ち込んでる顔の区別くらい、俺だってつくぞ。静音はそういうとこ、顔に出るから」
「だから先に帰っていいって言ったでしょうが。ぶすったれた顔見ても、不愉快でしょ？」

「不愉快だなんて、なんでそういう発言が出る？静音が落ち込んでたら、俺に引き上げられないのかって落ち込むのは、こっちのほうだ」
えーと、昭文さん？今、すっごく恥ずかしい発言をなさいませんでしたか。
「園児にしか効かないかも知れないけどな、俺にできるのはこういうことだけだ」
大きな手が、あたしの髪をくしゃくしゃと掻き混ぜ、サイドブレーキ越しに緩く抱きしめる。
「俺は一般企業の仕事はわかんないからな。でも、静音の威勢が悪

いと、調子が狂う」
昭文の高い体温が、緊張をちょっと解きほぐして、あたしの心が柔らかくなってく。
園児にしか効かないわけじゃなかったね、あたしにも効く。
しばらく腕をまわしていた昭文が、もう一度髪を撫でる。
こんなことで、楽になっちゃうのか。
「静音は弱いところを見せたがらないから、疲れるんだ。言っただろ、俺は打たれ強いんだから、手荒にされても壊れない」
「ん・・・」
また、への字に結んじゃった口は、さっきとは意味が違う。
こんなことで癒されちゃう自分が、悔しいだけ。

「そんだけだ。明日は早番だから、今日は早寝だ。おやすみ」
車のドアを空けて外に出た昭文は、あたしが発車すると、後ろで大きく手を振った。
他人に寄りかかるのは、苦手だ。
他人の感情を引き受けるのも、苦手だ。
でも昭文の手は、とても気持ちが良かった。
あたしの手もそんな風に、昭文が落ち込んでいる時に癒せるんだろうか。

どこまでが「甘え」で、どこからが「依存」になるんだろう。
あたしは多分、今まで付き合ってきた男たちにも、自分の負の感情を引き受けてもらおうと思ったことはない。
だから、あんな風にあっさりと気持ちがほぐされてしまうものだと、思っていなかった。
昭文はけして急かしたりしていないけれど、時々急激にあたしにずかずかと近寄ってくる。
そしてそれは結構――――気持ちがいい。

その1

１０月に入り、昭文は忙しくなった。
スポーツクラブにもあまり顔を出さないで、帰宅した後にも何か工作をしているらしい。
工作っていうのは文字通り工作で、折り紙で飾り物を作ったり、飴玉をいくつか仕込んだ首飾りを作ったり。
つまり、運動会で使うものらしい。
「あきふみ先生は、お遊戯教えたりするの？」
「するよ。子供は音楽に合わせて身体を動かすの、好きだもん」
シシャモの中の鯖が、「大きな栗の木の下で」を踊る。
可愛らしいといえば、可愛らしい・・・のか？
「だから、自分で話を振って笑うな！」

「保育園に鳴子があるから、締めに『正調』踊るぞ。年少児は眠くなって帰っちゃうから、５・６歳児だけだけどな。踊りのお姉さん、来るんだろ？」
そう言えば、見に行くと言った気はする。
「そうだね。園長先生にも、ちゃんとお礼言ってなかった」
お祭から１ヶ月以上経っている。

高くなってきた空を見上げて、昭文の勤め先の保育園まで自転車を走らせた。
まだ気温は高い。
せっかくの運動会、晴れて良かったね。
別に身内じゃないから、お弁当を持っていくわけじゃない。
ちょびっと運動会を見るだけの予定。
あ、正調を踊るって言ってたっけ。じゃあ、午後もちょっと見ていこうかな。

狭い園庭の中に小さいトラックが作られていて、そのまわりにはぎっしりとビニールシート。
幼稚園と違って、歩くのに精一杯の子供が「かけっこ」の意味さえわからないで、親と手をつないで歩く。
昭文が支えてる玉入れのバスケットは、多分あたしの頭よりも低い位置にある。
薄緑のポロシャツにジャージと、ピンクのエプロン。
どう見てもかっこいい筈なんかない、そのいでたち。
あたしに気がついた昭文は、小さく手を振って合図してみせた。
手なんか振らなくても、どこにいるのか一目でわかるっての。

昭文担当の「うめ組さん」は4歳児で、話が通じてるんだか通じてないんだかわからない大きさだ。
「うめ組さんの、ふうせんリレーです」
アナウンスが入って、5メートル刻みのリレーがはじまる。
バトン代わりの風船を次の子に渡すだけなのに、5メートルのコースを外れる子、転ぶ子、待ってられなくて自分から受け取りに行く子・・・やっぱりカオスだ。
それでも競技が終わった順に、昭文はせっせと飴玉を仕込んだ首飾りを掛けてやってる。
膝をついた上に腰を屈めて、満面の笑み。
良い、顔じゃないの。すごく、良い顔。

全員に首飾りを掛けて立ち上がった昭文の横に、子供たちが並んで頭を下げる。
退場させて子供たちを席に座らせた後、昭文は何気ない風にあたしの立つ場所に来た。
「これが、俺の仕事。悪くないだろ？」
「うん。子供たちが昭文のことを、好きなんだって伝わってくる」

逆光で機嫌良く笑う昭文の肩越しには、秋の始まりの青空。
かっこいい筈なんかない仕事着に、やけにときめいちゃったのは、
絶対に言わない。

その2

お昼の休憩時間に一度退場しようと思ったら、比較的大きめな女の子に声を掛けられた。
「おどりのおねえさん！」
ああ、冷たいタオルで首を冷やしてくれた子だ。
「こんにちは。運動会、見に来たよ」
「びょうき、なおった？」
病気？ああ、熱中症のことか。
「治ったよ。看病してくれたから、すぐに治っちゃった。ありがとうね」
「なつは、お水いっぱいのまないと、びょうきになっちゃうんだよ！」
・・・はい、身にしみました。ご忠告ありがとう。

小首を傾げて話す彼女の後ろから、若いお母さんがあらわれる。
「ゆまちゃん、お弁当食べないと・・・あらっ！踊りの先生！」
「・・・先生じゃありません。その節は、ご迷惑をおかけしました」
「いえいえ。原口先生が慌てた顔してるから、おかしくて。普段怒ったり慌てたりしないのに、あーんな顔」
お母さんが愉快そうに笑う分、いたたまれない。
「この子がね、踊りのお姉さんみたいになるんだって、家でも鳴子鳴らしてて」
ゆまちゃんは、お母さんの後ろに隠れた。
「じゃあ、ゆまちゃんが踊るとこ、見せてね」

一番近いコンビニエンスストアでサンドウィッチを買って、保育園に戻る。
お昼寝の必要な小さい子は帰宅してしまい、園庭は混雑が緩和され

ている。
残りは5歳児と6歳児のかけっこと、最後に「正調よさこい鳴子踊り」だ。
そこまで見ていこうかなーなんて思っていて、すっかり忘れていた人から声を掛かった。
「あれ？篠田さん？」
会社のパートさんだ。
この人はお祭りに参加していなかったので、もちろんあたしが踊ったことを知らない。
「どうしたの？あ、やっぱり原口先生とつきあってるの？」
うう。そうですけど、ここで明るく言わないで。

パートさんと一緒にいた人は、お祭り参加者だったらしい。
「え？踊りのお姉さんって原口先生の彼女だったの？」
考えてみれば、保育園児のお母さんってのは、あたしと年齢がそう変わらないのだ。
あっという間に広がる話。
いたたまれません。帰っていいでしょうか。
「さくら組さんのかけっこが始まりますよ？ビデオ用意しなくていいんですか？」
開放されて逃げ帰ろうかと思ったんだけれど、園長先生は運動会が終わらないと忙しそうだし、ゆまちゃんが踊るのを見るって言っちゃったし。
身体を縮めること30分で、最後の締めの鳴子踊りになった。

小さい鳴子が子供たちに配られるのを見ていたら、一人の保育士さんが私にも差し出す。
「あのっ！あたし、関係者じゃないんですけど！」
「原口先生のお身内の方なら、関係者です。どうぞ」
みっ身内？熊のヤツ、保育園であたしをどう説明したんだ。

高校の後輩で、ちょっと踊れる子、程度の説明だと思ってたのに。
ますますいたたまれなくなって、頭を下げながら鳴子を受け取った。

その3

こちらへ、と押し出されて、園庭の中に立つ。
もう、やけくそ。二度と来る所じゃないし、園長先生に挨拶したら帰るし。
あたし、子供いないんですけど！身内でも関係者でもないんですけど！
熊のヤツ、覚えとけ。
昭文の身内だった覚えはないし、これから身内になることも承諾してない。

言うたちいかんちや　おらんくの池じゃ　潮吹く魚が泳ぎよる
よさこい　よさこい

頭ひとつ分どころか、子供たちに囲まれてるってのに腰から上が全部丸見えの昭文が、中心でにこやかに踊る。
ちゃんと踊れてるじゃないの。
園庭の上は、運動会らしい秋の空。
子供たちが思いっきり昭文の顔を見上げて、やっぱり子供たちを思いっきり見下ろす昭文の顔が、優しい。
悔しいことに、ちょっと甘えてみたくなる顔。
鳴子を鳴らしながら、あたしが見ていたのは昭文だった。

かたちばかりの閉会式の後、参加賞を貰った子供たちが、親に連れられて帰っていく。
ひとりひとりに挨拶している園長先生に、声を掛けるわけにもいかず、そのまま待つ。
「どうだった？保育園の運動会は」
まだピンクのエプロンをつけている昭文は、園庭の片付けの後に反

省会があるらしい。
「懐かしくて、楽しかったよ」
そう答えてから、ふっと思い出す。

「あたしがお祭りに参加する時、保育園の人たちにどういう関係だって言った？」
「なんて言ったかなあ・・・家族に近い身内で、俺によさこいを教えてくれた人って・・・俺が上手だって褒めてもらったから、ちゃんと踊れる人に・・・」
「家族に近い身内、ですって？」
「うん。さすがに、婚約者だとは」
「それすら、承諾してない！」
昭文は、園児たちに向ける優しい顔じゃなくて、ニヤニヤ笑いだ。

「静音は承諾する。俺たちは相性がいい」
子供たちが全員帰ったらしく、他の保育士さんが園庭を片付けだしたので、昭文と話しているわけにいかなくなった。
園長先生にお祭りに参加させていただいたお礼を言い、迷惑を掛けたお詫びをしたら、あたしがその場に留まる理由はない。
自転車を走らせながら、昭文のダサい仕事着を思い出す。
俺たちは相性がいい。
悪いと思ってるわけじゃないんだけどさ、結論ありきで話を持っていかないで欲しい。

その4

夜、酔っ払った昭文から電話が来る。
「静音ちゃーん、あいしてるよーっ！」
「アホかっ！」
「明日は早い時間においでー。昼間っから楽しいことしようねー」
楽しいこととは、何ぞや？
電話が切れそうもないので、とりあえず「わかったわかった」と言っておく。
そんな姿を見たら子供たちが泣きます、あきふみせんせい。

薄緑のポロシャツとピンクのエプロンは、あたしの頭に焼き付いてしまったらしい。
そしてその姿を思い出すと、背景は秋晴れの空になる。
懐かしいような慕わしいような気分になるのは、子供たちに向ける表情に見覚えがあるからだ。
美術館で原爆の図に怯んだあたしの顔を、覗き込んだ時。
昭文が弱者に向ける視線は、常に「手を貸す準備はできている」の合図みたいだ。
ベッドの中で雑誌を広げながら、「結婚」について考えたりする。

たとえば今、昭文が目の前からいなくなったら。
多分、悲しいとは思う。しばらくは泣くかも知れない。
そしてしばらく泣いた後、あたしは次の恋の相手を見つけるだろう。
どうしても昭文じゃなくてはいけないという、強い思い込みをあたしは持っていない。
昭文はあたしを「手元に置きたい」と言ったけれど、あたしは昭文の懐にいる気が、ぜんぜんしないのだ。
これは、あたしの方の問題なんだろうか。

で、結局寝坊して、洗濯したり掃除したり、母の庭仕事に呼ばれたりで、焦れた昭文からメールが来る。
「夕ご飯に帰ってくるの？」
「わかんないから、用意しなくていい」
返事して、車庫から引っ張り出すのは自転車だ。
「遅くなるなら、自転車はやめなさい。最近物騒だから」
「えー？歩きじゃないんだから。こんな住宅街だしー」
生返事で走り出す。
中高生みたいに無防備に足を出して歩いてるわけじゃなし、深夜になるわけじゃなし。

昭文のアパートの自転車置き場に自転車を入れ、スニーカー（でかい）をドアストッパー代わりに挟んだ玄関を開ける。
「おお。待ってたぞ。よく来たよく来た」
だーかーらーっ！抱え込んで頭撫でないで！園児じゃないんだからっ！

その5

園児と違うのは、お喋りしてるうちに隣の部屋に雪崩れ込んじゃうことだけど。
「昼間っから楽しいことしようって言っただろ？」
「それについての返事はしてません！」
「え？生理？」
「・・・じゃないけど」

☆

ウトウトしているうちに、暗くなる。
「メシ、食ってくだろ？買い物行くけど、何食う？」
「あたしも一緒に行く」
服を着けて、一緒にスーパーに向かう。
男と一緒に夕食の買い物したことなんて、あったっけ。
大学時代につきあった男の部屋で、料理を作った記憶はあるけど、あれは材料を持ち込んだ気がする。
一緒にカートを押していると、顔見知りに会う。
「あれ？静音ちゃん、結婚したの？」
「してないんですー。友達と集まってるだけで、買出し係なんです」
地元だから、いらない詮索除けは必須だ。
「生姜焼き、何枚食う？」
「いや、普通にっ！」
熊に人間の普通は、通じない。

一緒に買い物して一緒に料理するっていうのが、なんだか慣れない。
昭文のアパートは古いので、キッチンはそんなに狭くないけど、全体的に背が低い。

あたしには助かる高さだけれど、全部に腰を屈める昭文は、ずいぶん大変そうだ。
「じゃ、あたしが包丁使うから、昭文がお鍋の方」
なーんて役割分担は、結構スムーズ。
キャベツを千切りする間に、昭文がフライパンの中に生姜をすりおろす。
「食器、偏ってない？」
「ああ、結婚式の引き出物で小鉢が重なったからな。後はカレー皿」
そう言えば、前回は小鉢でご飯を食べた気がする。
今回も、買ってないや。

昭文が上機嫌な顔で、食卓の前に胡坐をかく。
「いいなあ。普段はひとりで作って食うだけだから、皿ひとつで済むものだもん」
「カレーとか？」
「カレーにすると、3日間カレー食べ続け。丼モノが多いかな」
満足そうな昭文の顔が嬉しいなんて、あたしもヤキがまわったな。
一緒に洗い物もして、帰るような時間になる。

「送るぞ？」
「自転車だもん、大丈夫」
「明るい道で帰れよ。携帯も、すぐ出せるようにしとけ」
やっぱり、お母さんか、あんたは。
「何かされそうになったら、迷わず股間蹴り上げろよ」
「はいはい」
まだ何か言いたそうな昭文を残して、自転車を漕ぎ出す。
スポーツクラブのお風呂は行けないけど、今日は家で長風呂しようかなーとか思いながら。

その５（後書き）

☆は、月と仲良しですから・・・（笑）

その6

前方でガシャンと音がしたのは、自転車を漕ぎ出して1分もしていなかったと思う。
前に車を停めた児童公園の前だ。
倒れた自転車と、後ろのドアを開けた車に、一瞬交通事故だと思った。
違うと気がついたのは、女の子が車に押し込まれそうになるのを見たときだった。
後から考えると、あたしの行動はひどく無鉄砲だったし、相手がひとりだったことはラッキー以外の何ものでもない。
「何してんのよっ！」
自転車のスタンドを下ろし、駆け寄った。

押し込もうとしていた男の注意がこちらを向き、少々緩んだ手から高校生らしき女の子が抜け出すと、男は運転席にまわり、後ろのドアを開けたまま車を急発進させた。
道路にへたり込んでいる女の子の自転車を起こし、道の端に移動させる。
短いスカートを穿いているわけでも、過剰に足を見せびらかしているわけでもない、おとなしそうな女の子。
泣き出したその子の肩を抱き、一緒に道端に座りながら、昭文に電話をした。

塾の帰りなんです。普通に走っていただけなのに、自転車の荷台を急に引っ張られて。立ち上がったら後ろから羽交い絞めで。
しゃくりあげながら震えている女の子を放っておくわけにはいかない。
家に電話させたところで、昭文が走って来る。

「ナンバー見たか？」
「そんなもの、覚える暇なかった！」
自分の口から出た声は、震えていた。

女の子のご両親が車で迎えに来て、自転車を積み込んだ後に丁寧にお礼を言っていった。
頭を下げて見送った後、足から力が抜ける。
大丈夫か、と肩を支えられたら、あたしの喉は勝手に呻き声を上げた。
「相手がひとりで良かった。怖かったろう」
そう言われてから、刃物を持っていたり複数の相手だったりすることを想像する。
「怖かった」
言葉を口に出したら、涙まで一緒にこぼれた。
「怖かったよ。すごく怖かった」
よしよし、と頭を撫でられたら、感情の抑えが利かなくなった。
子供みたいに拳で涙を拭いながら、あたしはただ頭を撫でられていた。

その7

自転車は置いていけと言われて、素直に昭文のアパートに戻った。
ひとりで暗い道を走る勇気は、出そうもない。
昭文が車のエンジンをかけるのを、黙って見ていた。
「住宅街だし自転車だしって、俺も軽く考えてた。もう、自転車で来るな」
怒ったような顔で言われて、頷く。
「自転車は、明日家まで届けてやる」
「でも、あたしは被害者になってないよ」
「それはラッキーだったからだ！おまえがあの子でも、何の不思議もない！」
ご尤もだけど。

家の前で車を停めた昭文は、あたしが玄関に入ろうとしたら横から滑り込んできた。
まだ親に紹介する気なんて、全然ないのに。
「なんのつもり？」
「早まりゃしないよ、ご挨拶するだけだ」
ご挨拶って、もう夜の9時過ぎだってば。タダゴトじゃないと思われちゃうじゃない。
「静音？玄関先で何やってんのよ」
母が、顔を出した。

「いつも遅くまで申し訳ありません。原口と申します」
「あら、送ってくださったんですか？まあ、ずいぶん大きな・・・」
玄関の靴脱ぎの上に立った母が、昭文を見上げる。
「家の近くで事件があったので、自転車を置いてきました。明日、持って参りますから」

「事件って・・・それより・・・ねえ、お父さん！」
居間に向かって父まで呼び、なんだかきまりの悪い展開になった。
我が家は全員が小柄だ。
居間にこんな大きな物体があったことは、いまだかつて見たことない。
早まっちゃいない筈の熊は、公務員らしい手堅い態度で、母の信頼をあっさりと掴んで帰って行った。
「ああいう誠実そうな人なら、静音も安心ねえ」
「いや、大男総身にナントカかも知れんぞ」
父は面白くなさそうな顔だけど、それはまあ、いつものこと。
あたしは「事件」の後の自分を考えていた。
あのまま女の子をご両親に引き渡して、ひとりで帰ることもできた筈だ。
なのに昭文に泣きついたのは、心細かったから。
それだけ、あたしは昭文に頼っているのか。

園児だけじゃない、あたしの前にいる時も、多分昭文はピンクのエプロンなんだ。
ニヤニヤ笑ってるけど、その下には懐かしい優しい顔を持ってる。
その顔を受け取れる準備はもう、整ってた。
あたしはあたし自身を昭文に渡す覚悟は、できてる？
今日見せてしまった泣き顔を、悔やむ気持ちはない。

その1

「おい、パンツも買っといたほうがいいぞ」
ちょっと遠出帰りのコンビニで、お茶を買って手洗いを借りた時のことだ。
「ぱんつ？」
「女は毎日、換えたいんだろ？」
えーと、下着のショーツのことですか。
別に一枚しか持ってないわけじゃない。家に帰れば、引き出し一杯分の下着はあるんですが。
「持って歩いちゃいないだろ？今日はこのあたりで泊まるから」
・・・なんですと？

「だって、どこも予約なんて取ってないじゃない！急に泊まるとか言ったって！」
「紅葉には少し早かったから、どこでも空いてるだろ？空いてなければ、ラブホでもいいし」
「家にも泊まって来るなんて一言も・・・」
「なんだ？そこまで箱入りだったか？」
「お財布も薄いし」
「一緒に泊まって女に金を出させるほど、野暮じゃないよ」
「化粧品、持ってきてない」
「お泊りセットとやらが、そこに売ってる」
ええええっと。

「あたしね、隣に人がいると眠れないの」
「よく、ウトウトしてるじゃないか」
「そこまでは大丈夫なの。熟睡できなくて、睡眠がぶつ切りになるの」

昭文はポンと、あたしの頭に手を置いた。
「俺が、静音と一緒に眠りたいんだ。勝手で悪いな」
悪いとか言いながら、前言撤回はしない強引さ。
「ま、睨むなよ。目が覚めるたびに、腹いせに蹴っても文句は言わないから」
蹴ってやる。覚悟しろ。

小さな温泉旅館を宿に決め、普段持ちのバッグとコンビニのレジ袋のあたしたちは、部屋に通された。
「お、家族風呂入ろ、家族風呂」
チェックインが6時だったので、夕食を7時半頃と指定していた。
昭文のアパートでは結構長いこと、ふたりだけの時間を持っているのに、場所が変わっただけで照れくさい。
母に泊まると連絡をして、とりあえずお茶を入れる。
慣れないシチュエーションに、どうも落ち着かない。

「はじめから、泊まるつもりで来てた？」
「おう。だから温泉の近くに来たんだ。アパートだと、静音は帰っちゃうだろ？」
はーっと大きく溜息を吐く。
「あたしが明日予定があったら、どうするつもりだったの？」
「高速に乗れば、2時間もかからない。朝イチで送るさ」
また上手く持って来られちゃったのか。

その2

家族風呂家族風呂とうるさい昭文に、「15分してからでないと来てはいけない」と念を押して部屋を出た。
髪を洗ったり身体を洗ったりする姿を、見せたくない。
コンビニで買った下着と備え付けの浴衣を抱えて、通路を歩く。
なんだか、変な感じ。
どっちにしろ泊まることになっちゃったんだから、腹を括って旅情を楽しまなくては。

言いつけを守った熊が、「いいかあ」と言いながら、浴室に入ってくる。
全裸で「いいかあ」もないもんだ。
がしがしと髪を洗い、石鹸を泡立ててタオルで身体をこするのを、見ていた。
マシントレーニングで身体を鍛えてるのは、趣味なわけ？
「保育園で子供にじゃれつかれた後、よく運動する気になるわね」
「太る体質だからな。継続的に運動しないと、大変なことになるんだ。それに、所属の希望は保育園じゃなかったし」
「保育科出たんでしょ？」
「障害児福祉施設も、保育士」
知らなかった。

どっこいしょ、と昭文が湯船に入ると、湯がざばあっと流れた。
ぬるめのお湯は長風呂にちょうど良くて、するすると肌に気持ちいい。
「あたし、昭文のこと、あんまり知らないね」
「俺も静音のこと、知らないぞ？これから一生かけて、知ってけばいいんじゃね？」

「うん」
何故素直に返事が出ちゃったんだろう。
失言！取り消し！言葉を口の中に戻してください！
あわあわと慌てるあたしの胸を、昭文が唐突に掴んだ。
「うん、いい傾向だ」
その行動とセリフに、因果関係はないでしょーっ！

「一緒に風呂入ってメシ食って、隣で寝る。そんで、起きると隣に静音がいるんだ」
昭文があたしの肩を撫でながら言う。
「それをやってみたかっただけ。悪かったな、騙まし討ちで」
「本当に。予告くらいは、して欲しかったね」
「静音サンは、準備期間が長いから」
横を向いてみせちゃったけど、怒ってはいないの。本当はね。
そうか、起きると隣に昭文がいるって思う感じは、そんなに悪くないね。

その3

仲居さんが、瓶ビール2本を追加した夕食を持って来る。
他人にお給仕されるのも、なんとなく慣れないな。
そんなにお高い旅館じゃなくても、こういうのって年季と貫禄が必要。
大体、浴衣姿で差し向かいっていうのに照れちゃう。
浴衣って、寝てるうちに肌蹴ちゃうんだよね・・・やだなあ。

夕食も済んで、ちょっとお庭に出てみようかなんて言ってるうちに、今度はお布団を敷きに来る。
こういう時って、どっち向いてていいやら。
昭文があたしの顔を見て、面白がっているのが悔しい。
「ススキのかんざし、しないの？」
「古っ！お父さん世代じゃない。膝枕なんてしないわよっ」
確かに、旅の宿ではあるけどね。

大きい旅館じゃないから、お庭に出たって何があるわけじゃなし。
秋のお月様はしんとした美しさで、まだ咲き残している秋の花が、暗闇に薄ぼんやり映える。
借りた下駄が窮屈そうな昭文は、懐手。
「ちょっと冷えてきちゃったな。もう一回お風呂入ろうかな」
「入って来いよ。ロビーに自販機があったから、ビールでも買っとくから」
旅館に入って通路を右左に別れ、ひとりでお風呂に向かった。

広い湯船は私ひとりで、少し怖い。
お湯越しにするすると自分の肌を撫で、また昭文のことを考える。
俺たちは、相性がいい。

うん。昭文と一緒に居ることは、不愉快だと思ってない。
頼りにしていることも、認めたくないけど知ってる。
そしてすごく重要なことは、あたしは昭文と継続して寝たいと思ってる。
だから一緒に眠ってみるのも、必要なことなのかも知れない。
少なくとも、夜の顔と朝の顔を一時に見るチャンスだ。
つまり結婚すれば、それが「日常」なんだから。

こう考えるってことは、結婚するには、やぶさかでないと考えてるってことだな。
昭文と生活するってことに、少なくとも否定の感情はない。
男に守って欲しいとか頼りたいとかって、そんな欲求はないけど、たとえば昭文が何か望んだ時、一緒に望んでやることはできる。
そうか。返事はもう決まってるのか。
踏み出すきっかけさえ掴めれば。

その4

部屋に戻ると、昭文はテレビをつけずに、窓越しに外を眺めていた。
小さなテーブルの上にはビールの缶。
「あったまって来たか。今日はのんびりだ」
すでに機嫌良くほどけている顔を見て、つんつるてんの浴衣から出ている足を見下ろした。
備え付けの浴衣って、あたしは腰紐で上げが必要なんだけど。
「昭文みたいに大きい人って、あっちもこっちも詰めたり上げたりしなくて良くて、いいなあ」
「その代わり、入んないのがある。バスローブが肩で引っかかる」
足して2で割れば、ちょうどいいかもね。

まだ観光シーズンじゃない旅館は、物音が少ない。
テレビの音は必要ない。窓を開けると、微かに虫の声がした。
過剰に喋って、気持ちを引き上げたりもしなくていい。
機嫌をとったり、はしゃぎすぎて困らせたりもしなくていい。
昭文はそこにいて、落ち着いた顔で座っている。
昭文の足元に座って、筋肉質の足に寄りかかってみる。
悪い感じじゃないね、こんな時間の連続で生活するんだとしたら。

黙りがちなまま時間が過ぎて、夜更かしの習慣のない昭文が、布団に入ろうと言う。
掛け布団をはぐって上に正座したら、お定まりの展開になった。

☆

布団は二組敷いてあるのに、昭文はあたしを抱えたまま寝息を立て始めた。

先に眠っちゃうんじゃないの。蹴ってやろうかな。
でも、いいや。眠りに落ちる前の、昭文の声が聞こえてたから。
「明日の朝、一番に見る顔は静音だな」
眉はしっかり描いてあるけど、顔は浮腫まないだろうか。
昭文の腕の中は、布団なんかいらないくらい暖かい。
はじめから猫の皮着用じゃなかった昭文は、睡眠不足で不機嫌な顔を見せても、動じないかも知れないな。
そんなことを考えているうちに、あたしも眠りに落ちた。

その5

夜中に何度か目を覚ました。
蹴っていい、と言っていたけれども、腹は立たなかった。
隣の布団に移動はしたけれども。
目を閉じると昭文の太平楽な寝息が聞こえ、それが「俺はまったく警戒してないし、気も遣ってない」と言っているようだと思う。
多分あたしだけが、自分自身を堰き止めてる。
甘えて頼りきりたい自分と、自分の感情を無防備にさらけ出したくない自分の、線引きができてないんだ。
両方の部分があたし自身で、普段ならばそれを私用と公用に分けていられるのに、昭文に対してだけ、それができない。
だから常に不安定で、迷っているようなことになっちゃうんだ。

次に目を覚ましたらすっかり朝で、寝返りをうったら布団の中の昭文と目があった。
「おはよ。蹴られなかったな」
「おはよ。蹴っても起きなかったよ」
「嘘？」
「嘘」
少し無精ひげの浮いた顔。
よっしゃ、と声をかけて、昭文が上半身を起こす。
浴衣が肌蹴て、帯だけがお腹に巻きついてる。
あたしも慌てて自分の浴衣を、布団の中でもそもそと直した。

洗面所の鏡に向かって、浮腫み具合をチェックする。
うん、水でパッティングすれば大丈夫なレベルだ。
自分がおそれていたよりも、よく眠ったらしい。
朝ご飯は食堂に出ることになってる。

とりあえず、着替えて部屋の外にでる支度をすることにする。
「こっち見ないで！向こう向いて着替えなさい！」
「冷たいなあ」
たくましい背中を向けた昭文が、シャツに頭を通すのを見ていたのは、あたしの方だ。
ああ、子供たちがぶら下がるの、理解できるな。
こっちにおいでって差し出してるみたい。

差し向かいで朝食を食べて、朝からの食欲に感心したりする。
「おかわりは？」
迷いなく渡されるお茶碗に、ご飯を注ぐ。
あたしの食べきれないお魚も卵焼きも、全部熊のお腹の中。
「さて、今日は何しようか」
「適当に走って、良いところがあったら止まろう。ノープランで」
その提案が気詰まりじゃないのは、プランなしでも昭文とならば不愉快にはならないと、知っているから。

その6

立ち寄った公園は、駐車場から土器の飾られた地下通路をくぐった先だった。
短いけれど、ひんやりした空気。
遺跡の復元住居を見に行こうと歩き出し、ふと昭文の腕に自分の腕を絡めた。
肘が上がっちゃう高さなんだけど、考えてみたら手を繋いで歩いたこともないなーなんて。
だって地元で会うことが殆どだし、そうすると知り合いと会う確率が高いんだもん。
「お」
昭文があたしを見下ろして、目尻一杯に皺を寄せる。
「いいでしょ、腕くらい組んだって」
「いいも悪いも。ああ、昨日からいい日が続くなあ」
仕組んだくせに。

広大な公園の真ん中で、昭文が大きく伸びをする。
「気持ち良いな、ここ。今度は弁当持って、朝早くから来よう」
お天気が良くて、良かったね。昭文の上には、雲がいくつか浮かんだ空が見える。
・・・デジャ・ヴ？
なんだか、同じような光景を前にも見た気がする。
川越のお寺で、ザリガニ釣りで、運動会で、昭文の肩越しに見ているのは、いつも綺麗な青い空だ。
ひとつの光景が、脳裏に広がった。
昭文がその広い肩に小さな男の子を乗せて、芝生の上を歩く後姿。

空は晴れて、白い雲がふたつ浮かんでいる。
後ろからピクニックバスケットを持って歩いているのは———あたし？
すべて後姿の風景の中で、声は聞こえるけれども、話の内容は聞き取れない。
子供を肩に乗せたまま振り向いた昭文が、目尻に皺を寄せて、何か話しかける。
答える声は楽しげだけれど、やっぱり聞き取れない。

「どうした？ぼーっとして」
話しかけられて、我に返った。
あたし、今、何を見てたんだろう。
目の前に広がるのは、芝を敷き詰めた広場だけだというのに。
あたしに話しかけるために屈みこんだ昭文の肩越しには、やっぱり青空。
ねえ。あたし今、とっても幸せみたい。
私用とか公用とか、感情のバランスとか、どうでもいいや。
青空を背負って立つ人に、そんなこと考えるのは、おかしいよね。

「昭文と旅行できて、良かったなって思って」
返事は、言葉じゃなくて「たかいたかい」だった。

その7

帰りの車の中で無口だったのは、急激に湧き上がってきた感情に気をとられていたからだ。
朝から楽しかったんだもん。
「疲れたか？寝てもいいぞ」
「眠いわけじゃないの」
昭文が窮屈な車を運転しながら、時々ラジオにあわせて歌う。

帰りたくない。このままの時間を続けたい。
昭文と同じ場所で、ふざけたり拗ねた顔をしたりしていたい。
どうして、こんな気持ちになっちゃったんだろう。
会いたくて会いたくてたまらないことなんて、なかった筈なのに。

見覚えのある通りに入ったら、どんどん寂しくなった。
「静音、どうした？寝ちゃったか？晩メシ、どうする？食って帰る？」
昭文の陽気な声が、帰着を喜んでいるように聞こえて、悲しい。
あたし、どうしちゃったんだろう。
ちょっと疲れてるし、家に帰って長風呂して、自分のベッドで横になりたいのに。
「おい、晩メシ」
「いらない」
「何怒ってんだ」
「怒ってない」
「怒ってるだろ、それ」

ぶすったれたまま夕食の相談なんてできなくて、家の横に車をつけてもらう。

「やっぱり疲れちゃったんだろ。今日はよく寝ろよ」
そんな風に言う昭文は、まだ機嫌の良い顔のままだ。
あたしの不機嫌な顔が、気分良い筈はないのに。
帰っちゃ、やだ。まだ、あたしは昭文に笑って見せてないのに。
あたしの髪をくしゃっと掴んだ昭文は、目尻に皺をいっぱい寄せて
「おやすみ」と言った。
「うん、明日、トレーニングに行く？」
「時間があればね」

こうして、あたしをグラグラさせた週末が、終わった。

その1

会った時から、昭文の様子はおかしかった。
普段ならあたしに合わせる歩調が、なんだか中途半端に自分のペースだ。
顔、作ってる。
その程度に、あたしは昭文の表情を見ることに、慣れてきてるわけだ。
「何か、あった？」
「何が？」

シネコンで映画を見て、ロビーに立つ。
「なんか、イマイチだったね」
「そうか？」
すっごく上の空の返事で、これからご飯を食べて帰るまで、昭文は一日中作った顔をするんだ。
そう思ったら、我慢ができなかった。
「帰ろう」
「なんだ、買い物したいとか言ってなかったか？」
「要らなくなった」

何か言いたげな昭文を促して、車に戻る。
「昭文、何か我慢してるんでしょう？」
あたしの顔をしばらく眺めていた昭文が、「いや、別に」と呟く。
普段の皮肉っぽい口調も、ニヤニヤ笑いも出ない。
「何かあったんなら、言ってよ。仕事のこと？」
「言っても仕方ない。しかるべき人には相談してるし」
確かに、あたしには保育園のことなんて、わからない。

わからなくて、何にも力になれないんなら、本当は聞いても仕方ないんだ。
だけど、しかるべき人には相談ができて、あたしには弱音も吐かない。
そんなの、悔しい。
あたしよりも昭文の感情に近い人がいるなんて、悔しい。
「わかんなくても、言ってくれたっていいじゃない・・・」
あ、まずい。泣きたくなってきた。

「まさか、静音がそんな顔すると思わなかった」
「そんな顔？」
「心配してくれてんだな、ごめん。悪いな」
今、昭文の肩越しには青い空は見えない。
ふっと歪んだ昭文の顔に、彼が思いの外、持ち重りのする感情を抱えていることに気がつく。
「箍が外れそうだ。責任取ってくれ」
アパートに引き返す道の途中、歯でも痛むような顔をした昭文は、なんだか頼りなかった。

その2

「保育園で、子供の虐待の疑いを持ったときって、どうすると思う？」
「えっと、まず親に事情を・・・」
「虐待してる親が、虐待してますなんて言う例は、稀だ」
目の前で膝を抱える昭文は、大きな身体をもてあますように足をきゅっと身体に引きつけた。
「主任保育士と園長に相談して、気がつかないフリをするか、児童相談所へ通報するんだ。親が話を聞きそうな相手なら、それとなくカウンセリングを紹介する。それだけ」
「それって、その後そっちが対応してくれるってこと？」

「うん。本人に自覚があれば話は早いんだけど、あからさまにネグレクトだとか傷があるとかじゃない場合、対応は遅い」
「それ以外に何かあるの？」
「まあ、本人には自覚のない虐待ってのもあるわけさ。詳しく話したくはないけど」
何か、見つけちゃったんだ。
子供が傷ついている部分を見つけて、それで悩んでるのか。
「保育士の配置人数ってあるんだよ。公立は補助が入って恵まれてるけど、４歳児は３０人に１名。それを過不足なく保育するには、ひとりにだけ関わるわけにはいかない。だけどな」
ああ、苦しそうだ。
「どんどん表情が消えていく子供がそこにいるのに、俺はどうもできない」
泣いてる。涙を流しているわけじゃないし、声を立ててるわけでもない。

でも、昭文が泣いているのがわかる。
手を貸したいのに、何かしたいのに何もできない。
昭文を助けたくても、あたしも何もしてやれない。
大きな背中。あたしが乗ったってビクともしない背中は、あたしの短い腕じゃ抱えきれないかも知れない。
でも、あたしは今、こうしたい。

膝を抱えて丸まった昭文の両肩から、腕をまわした。
どうやっても体重が載っちゃうけれど、これであたしの気持ちが伝わるといい。
昭文が泣くんなら、一緒に泣いてあげる。
あたしにできることなんて、本当にそれしかないけど。
「ごめんな」
「ううん。話、聞けて良かった」
これだけのことで、あたしは自分の心に確認ができたことを知った。
昭文と生きていこう。

その3

深い秋になりつつある。
時折吹く風は冷たいけれども、まだすべては落ちていない木の葉の色を楽しみながら、歩く。
森林公園の、雑木林を散策するコースだ。
お弁当持参はすっかりキマリゴトめいていて、本日は朝から一緒に作った。
つまり、前の晩から昭文のアパートに居たってことだ。
やっぱり夜中に目を覚ましちゃうのだけれど、隣に眠っているのが昭文だと確認すると、眠りの続きが訪れた。
今に連続して眠れるようになると思う。
ただ、昭文が使っているセミダブルのマットは狭い。

空が高い。やっぱり昭文には、空が似合う。
仕事の悩みはちっとも解決していないみたいで、時々とても寂しい顔をする。
あたしにはどうしてやることもできなくて、だけど、ひとりでそんな顔をさせたくない。
あたしを膝の中に抱えて大きな溜息を吐く姿は、頼りなくて愛しい。
あたしにできるのは、その厚い胸に寄りかかっていることだけだけれど。

「あの子、転園するんだ」
昭文の悩みの原因の子供の話だと思う。
「離婚することになって、母方の実家に行くみたいだ」
昨晩は言わなかったことを、急に話し出したのは、外の開放感だろうか。
「夫婦喧嘩を見せつけ続けるのも、虐待のうちなんだよ。しかも両

方からお互いの悪口を、子供に吹き込んでたらしい。とっとと別居しちゃった方が良かったのに、子供のためとか言って同居続けやがって」
吐き捨てるように言う。
「子供が壊れかけてるのに、俺は何もできない。無力が身に沁みたよ」

「あたしね、その子が昭文の受け持ちで良かったと思う」
空を見上げながら、言った。
「昭文が心を痛めてたの、その子にちゃんと伝わってると思うよ。昭文は味方だって、ちゃんとわかってると思う。子供って、敏感だもん」
お弁当の入ったバッグを下に下ろした昭文が、あたしの腰を掬う。
ああ、また子供抱っこされちゃった。いい加減にして欲しいな、これ。

「捕まえたぞ」
「何？」
「捕まえた。逃げられると思うなよ」
えーと。落ち込んでたんじゃないんですか。
「ひとつくらい、思い通りになったっていいだろ」
ひとつくらいって、もうすでに、いくつものことを思い通りにしてる気がするんですが。
でもいいや。あたしの言葉で、ちょっと気分が変わったんだとしたら、あたしも嬉しい。
・・・捕まっといてやるか。

その4

抱っこされたまま、昭文の首に腕をまわしてみた。
雑木林の中は人が少ないし、あたしも昭文の言う方向に向かってるんだよって意思表示のつもり。
ねえ昭文、あたしたちって相性がいい。
あたしの短気さと昭文の気の長さと、昭文の強引さとあたしの冷静さ。
これからもっと知り合っていく過程で、喧嘩したり感情の齟齬があったりするかも知れないけど、とっても良い組み合わせだと思う。

「お弁当、食べようよ」
広場に向かう途中、昭文は下を向いて、あたしの頭の天辺にキスした。
立ったままじゃ視線も合わないあたしたちは、お互いを見ようとしなくちゃ表情も探れない。
だけど、その分知り合う努力ができる。
昭文のことをもっと知るために、あたしは昭文を見上げるのだ。
そして見上げた顔の後ろは、いつも青空だといい。
あたしを見つけてくれて、ありがとう。
そんなこと、言わないけどね。

背中合わせで、体重を全部預けて、寄りかかって座る。
わかりにくいかも知れないけど、甘ったれてるんだよ、これでも。
昭文の背中は大きくて、寄りかかってもビクともしない。
突然立ち上がって、寄りかかったあたしが転ぶなんてことは、絶対にない。
あたしはこの場所が気に入ってて、昭文が黙って寄りかからせているのは、それを知ってるからでしょう？

んん、幼稚園児に寄りかかられても、重くないとか言うかな。

「間違ってなかったな」
昭文がぽつりと言う。
「手元に置いとくのは、か弱くて頼りない姉ちゃんより、ちゃんと自己主張ができる喧しい女がいい」
褒めてんですか、喧嘩売ってんですか。
「俺は突っ走っちゃうからさ、引き摺られてついてきちゃう女は、多分不幸だ」
あたし、ずいぶん引き摺られて、巻き込まれた気がするんですが。
でも、そんなことはもう、どうでもいいや。
とりあえず、昭文の背中を背もたれにする特権は、あたしだけにある。

その1

航空自衛隊の基地の隣に位置するその公園は、展望台から夜景を見下ろすことができる。
そろそろ、夜に出歩くにはコートが必要かも知れない。
暖かいコーヒー入りのポットを持って、あたしと昭文は展望台に立っていた。
冬のはじまりの空は澄んでいて、冷たい空気が気持ちいい。
体温の高い昭文が、あたしの身体を抱えるように歩く。

「綺麗。その場に立つと、ただの住宅街なのにね」
「違いないや。で、いつ引っ越してくる？」
「はい？」
なんですか、その脈絡のない話の振り方は。
「俺のところでいいだろ？とりあえず二部屋あるし、生活用品揃ってるし」
「・・・あたし、一緒に住むって言った？」
「言わなくても、もうわかってんじゃん」
はい、こういう理論の人でしたもんね。

いきなり手を掴まれて、左手の薬指に通されたのは、銀色に光るリングだ。
「何、これ。ブカブカなんですけど」
「親から回って来たもんだ。結婚相手連れて来いって」
親にも、もう話したんですか。
あたし、承諾の言葉は口にしてないと思うけど。
「サイズ直して、しとけ。虫除けだから」
こんな綺麗な場所まで来て、プロポーズらしきことをされてるのに、

全然ロマンチックじゃない。
いつものジーンズ姿で、明日は友達と会うから、今日は家に帰るのだ。
どうせなら予告してくれれば、それなりの心構えで来たのに。
への字に結んじゃった口は、思いっきり不満を訴えてると思う。
優しくスイートにってのは期待できない相手でも、あたしもオンナノコなんだから、それなりに気分が・・・
「うわっ！」

これはいわゆる「お姫様抱っこ」ですね。
よくもまあ、ヒトの身体を、勝手に移動したり持ち上げたりするもんだ。
「決定事項に文句言うなよ。投げ落とすぞ」
「勝手なこと言うなっ！あたしにだって考えてることくらいっ！」
投げ落とされると困るので、首にしがみついたままの迫力ナシの抗議。
「ふうん？じゃ、何を考えてるのか聞かせてもらうことにしようか？」
「なんでもいいから、おろせっ！」

その2

「じゃ、考えてることとやらを、言ってみろ」
うわ、ムカつく。熊のくせに人間様に向かって大上段に。
「だから、話を勝手に、どんどん進めないでよ」
「勝手に進めてんじゃない筈、だけどなぁ。おまえさん、泊まっても文句言わなくなったじゃん」
うう、そうだけどさ。
「で、俺と一緒に居るのも、好きだよな」
その通りなんだけどさ。
「大体、続けていこうって意思のない男とやり続けるほど、プライド低くないよな。あんだけ時間かかったんだから」
ああ、なんだか、とてつもなくムカつく！

「昭文が、あたしのことをどう考えてるのか、あたしは聞いたことない！」
結婚だの手元に置きたいだのって言葉より、もっと前にある筈のものを、あたしはもらってない。
もっとも、あたしも口に出したことなんてないけど。
だって、理由が欲しい。
好きだから一緒に居たいんだって、言って欲しい。
じゃないと、あたしは昭文のペースに巻き込まれっぱなしで、言われるがままに自分の感情を動かしちゃったみたいな気がする。

「だから、結婚しようって」
「なんで？」
「手元に置きたいからって」
「だから、なんで？」
「気が合って、相性がいい」

「それだけ？」
引いてなんかやらない。展望台の下に投げ捨てられたって、絶対に言わせてやる。
昭文の根拠を聞かせて。そうしたら、私用も公用も使い分けないで、全部昭文に明け渡す。

「言わないと、わかんないのか」
「虫除けなんていらない。見た目に寄って来る男なんて、どうせ先に進まないんだから」
昭文は腰を伸ばして、気合を入れるように空を仰いだ。
「言やあいいんだろ。言いますよ」
不貞腐れた口調だ。

「静音は可愛い。外見じゃないぞ、その強気で慎重なところが気に入ってる」
「だから？」
だあっ！と声を上げて、頭を掻き毟る熊。
「好きですっ！だから、結婚しましょうっ！」
はい、よくできました。だから、あたしも逃げないで、ちゃんとお返事しましょう。
「はい。謹んでお受けいたします」

うーん。また子供抱っこされちゃったな。
ん、でも許してやるか。目尻いっぱいの皺が可愛いからね。
背景は夜景なのに、昭文の肩越しに見るのは、いつかの青空。
見上げなくちゃならない昭文は、いつも後ろに空を背負っている。
昭文の背負う空が、どんな色だとしても、あたしはそれを見続ることにする。

昭文の「結婚しない？」で始まったあたしたちは、あたしの承諾の

言葉で先に進む。
はい。謹んでお受けいたします。

ｆｉｎ.

その2（後書き）

本編は、ここでおしまいです。
長々と、ありがとうございました。

おまけ。

クリスマスイブの前の日に、昭文を家に連れて帰った。
あたしもテキレイキってヤツだし、昭文の職業は安定してるし、見てわかる通りの身体頑健で、何の問題もない。
父は相変わらず複雑な顔をしてるけど、一緒に昼食のあと、ビールなんか出してきた。
「気の強い娘だけど、大丈夫ですか」
そんな言葉が、唯一の抵抗らしい抵抗だった。

で、昭文の御用納めの一日前に冬休みに入ったあたしは、こうしてお鍋の支度なんかしながら、昭文の帰りを待っていたりする。
うう、不本意だ。
大体ここはまだ、あたしの家じゃないっつーの。
なのに、部屋で帰りを待ってると言った途端、昭文が「晩飯の支度してくれんの？」なんて超嬉しそうに言うもんだから、「それはやだ」って言えなくなった。

「ただいまー」
顔が解けきった状態の昭文が帰宅する。
「おかえりー」
もう、お鍋に出汁は張ってあって、泊まるつもりだから、お酒も買ってある。
「裸エプロン、期待してたんだけど」
なんですと？
「誰がするか！昭文がするんなら、後姿を見てやってもいいけど」
言った瞬間、思わず想像して眉間に皺を寄せてしまった。
「・・・何を想像した？」
「フリルのエプロンと、筋肉質の尻」

「見るか？」
「いい。いらない」

二人しかいないのに、９号の土鍋って一体どうよ？
日本酒を飲み始めると腰が落ち着いちゃうから、食事中はとりあえずビールにしておくことにして、すぐに夕食にする。
ポン酢を手渡すと、昭文は不思議そうな顔をした。
「水炊きって、塩味ついてるだろ？」
「え？ポン酢と大根おろしでしょう？」
まさかお鍋だけで、家庭によって違うとは、思ってなかった。
これからも、そんなことは沢山あるんだろうな。

「俺、シャワーだけでいいや」
あたしは夕方前に、スポーツクラブでお風呂に入って来たので、お風呂の支度はしてなかった。
こういうとこ、気を利かせとけば良かったのかしらん。
でもまだ、あたしはここではオキャクサマ・・・
「静音ーっ！パンツ持ってきてー！」
・・・客ではないらしい。

日本酒をちびりちびりと飲みながら、動物の生態番組を一緒に見ていると、ペンギンの子育ての映像が出た。
親ペンギンより一回り小さくて、グレーの羽毛の子ペンギンが、親のくちばしをつついて、餌をねだっている。
その仕草のあまりの可愛さに、つい真似してみたくなった。
昭文の胸倉を掴んで下を向かせ、唇でつついてみる。
何度か繰り返してるうちに、後頭部をがっしりと掴まれた。
「なんだ、その中途半端なの」
「子ペンギンっ！可愛かったんだもんっ！」
「映像で見るだけで触れないようなものより、そんなことされてる

と、催すんだけど」
何の催し物でしょうか。
昭文はとっととテレビを消して、居間との境目の引き戸を開き、寝室でＣＤをセットした。

☆

夜更かしはしない昭文が眠ってしまった後、腕を抜け出して一人で居間に座った。
隣の部屋から聞こえる健やかな寝息を邪魔しないように、薄暗い部屋でテレビの音を絞る。
こっそり残りのお酒を飲みながら、これから先について考える。
お正月の三日には、昭文の実家に挨拶に行く。
我が家より少し田舎風味の地域で、我が家とは反対に全員が大柄だという家族だ。
お嬢さんらしい服装の上に、猫の皮を三枚着用しなくてはならない。
昭文の育った家なんだから、猫の皮はいらないかな。

昭文を全部知ってるわけじゃない。
昭文にも、あたしの考えていることすべてが、わかっているわけじゃない。
焦ることはない、一生かけてのんびりと、お互いを理解すれば良いのだ。
隣の部屋から、昭文が寝惚け声であたしを呼ぶ。
「いつまで起きてんだ、ここに来て寝ろ」
はいはい、休みの日でも７時に起きる人だもんね。
一緒のお布団に入ると、毛布は昭文の体温で暖まっていた。

ｆｉｎ．

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4925u/

肩越しの青空

2011年9月17日23時52分発行